

主題: 私たちの存在と社会の構成、または私たちをかたちづくるもの

この授業は、主に教育学をはじめて学ぶ大学1年生の皆さんのために開講され、教育学部の生涯教育開発コースが担当するものです。生涯教育開発といっても、この授業は入門的な位置づけになっているので、生涯教育の専門的な知識を伝えるのではなく、むしろ教育学に関心を持ってもらうための課題提起的な内容となっています。(なお、ここで公開するのは講義のために準備したノートです。実際の講義は、このノートをもとにして、より充実した内容のものを講述しています。また、資料については、基本的にパワーポイントで提示していますが、著作権などの関係上、この OCW では公開できませんので、ご了承下さい。)

はじめに

生涯教育を考えるために

教育とは何か。教育とは、人間の成長と発達に働きかけて、ある価値を実現しようとする意図的な営みである。それは、形成の一部だといってよい。形成とは、人間そのものと環境との相互作用によって、人間自身が成長・発達していくことをいう。この形成の過程に関与するのが教育である。

教育学は、この教育という営みを扱う学問であり、そうであるが故に、人間の成長と発達そのものに深く関わる学問だといえる。この場合、広い意味での教育学には2つの方向が生まれる。

1つは、人間の成長・発達を考える時に、人間と環境との相互作用に重点を置き、環境が人間のあり方にどのように影響を与えるのかを見ようとするもの。これは、狭義の教育学の立場である。たとえば、子どもたちに不登校やいじめ、非行などの問題が生じた場合、それを子ども一人ひとりの問題だとは認識しながらも、それを社会的な関係の中に置き直して、子どもたちをめぐる教育現象だととらえ、その問題を引き起こしている環境の問題とあるべき変革のあり方を考えようとするのが教育学的な立場だといってよい。

2つは、人間の成長・発達を考える時に、人間と環境との相互作用をとらえはするが、環境からの影響をどのように受けとめているのかという、人間の心や精神の働きをとらえようとするもの。これは心理学的な立場ということになる。

そして、この心理学的な立場は、またさらに2つの立場に分かれている。1つは、健常者の心や精神の働きをとらえようとするもので、教育心理学の立場である。この場合、子どもやおとな一人ひとりの心の動きが重視されるが、それをさらに健常者一般のあり方として、とらえようということになる。たとえば、子どもたちの学び方についての心の動きを明らかにすることで、より効果の高い教育方法を開発しようということなどに使われる。2つは、いわゆる障害を持った子どもやおとなの心の動きをとらえ、その心が環境の影響をどのように受けて、そのような障害を抱え込むようになったのかを明らかにしようとするもので、臨床心理学の立場である。この場合は、一人ひとりの心の動きは異なるので、

子ども一般やおとな一般というとらえ方は普通はしない。しかも、その子どもやおとなの問題状況を、環境の受け止め方としてとらえ、その上で、いわゆる健常な子どもやおとなはそのような問題を呈しないがために、問題を抱える心のあり方を変えることで、現実の社会環境に適応させようとする傾向を持つことになる。

一般に、教育学的な立場は、社会環境変革的であり、心理学的立場は社会環境適応的だとされる。

生涯教育とは、このような人間の営みを、生涯にわたる時間的な流れの中で、とくに人間の成長と発達にあたる環境の影響を考えながら、人が人らしくあるための働きかけを考えるものである。しかも、生涯にわたるという場合には、その過程に人が生まれて、生活し、他者と生活を共にして、死ぬというそれぞれの段階を含むが故に、進学や就職という人生のイベントの他に、恋愛や妊娠・出産、さらに退職後の第二の人生を生きるための転機というイベントも含まれることになる。それ故、そこには思春期の人間関係の問題や妊娠・胎児の成長のあり方や出産のあり方、また加齢のともなう身体や心の変化なども検討の課題となる。

この授業では、以上のような観点を基礎にして、第1部で、現在の教育において大きな影響力を持っている学校の原理を、社会的な関係の中でとらえて、なぜ学校がかくも大きな影響を持つことになっているのかを考察し、第2部で、人間の成長と発達のうち子どもたちがどのようにして自分を形成しようとしているのかを考察して、学校をはじめとする社会的な教育のあり方がどのように子どもたちにストレスを与えているのかを考えることとする。そして、これらの考察を通して、子どもをはじめとする人が生きるということ、教育学的に見るとはどういうことなのかを考えてみたい。

第1部 学校の原理を考える

1. 学校を持つ社会＝近代社会とは何か

学校の原理を考える上でまず検討しなければならないのは、学校を持つ社会の特徴である。この社会は、近代社会と呼ばれる。これまで私たちが通ってきた学校は近代学校制度と呼ばれる。それはまた、たとえば、日本においては、明治以前の学校、つまり各藩に設けられた藩校や庶民の学習の場であった寺子屋などとは異なる国家の制度として構築されたものであった。

では、まず、近代社会とはどのような社会なのであろうか。(以下、第1部では、桜井哲夫『「近代」の意味—制度としての学校・工場』、日本放送出版協会、1984年、を基本的な参照文献として議論を進めます。少し古い本ですが、コンパクトによくまとまっていますので、是非、読んでおいてください。)

(1) 増殖する社会

近代社会の第一の特徴は、増殖する社会だということである。増殖とは、基本的に人口の増加を意味している。たとえば、地球の人口は、1860年頃約10億人、その後1925年頃に20億人、1960年頃に30億人、1980年頃に40億人、1990年頃に50億人となり、現在65億人ほどの人口へと急増している。また、先進国を例にとると、イギリスの人口は、1801年から1891年までの間に約3.3倍になっているのに対して、ロンドンの

人口は、同じく 1801 年から 1891 年までの間に約 5 倍になっている。人口の急増と都市への集中が起こっていることがわかる。

このような急激な人口増加の原因は、何であろうか。それは、今日でもいわゆる近代化の入り口にさしかかった地域や国で人口が急増していることを考えることで、ある程度の示唆を得ることができる。

たとえば、中国を例にとると、中国は元来多産傾向を示していたが、それが、経済発展しはじめることで人口爆発へとつながっていった。その大きな理由は、従来の貧困社会では、栄養状態や衛生状態がよくないために子どもは死にやすい存在であり、おとなは自らの出産行動を決める時に子どもの死にやすさを計算に入れているということである。それが故に、多産多死の社会であったものが、経済発展をはじめ、栄養状態や衛生状態が改善されることで子どもは死にくくなるが、おとなの出産行動はそのままであるが故に、人口の急増を招くことになり、しかも、経済発展の初期には子どもも労働力として重視されるため、子どもが多ければ多いほど家計にとっては利益になる状況が生まれ、それがさらに多産傾向を促すことになる。これは、過去、日本においても起こっていた現象である。

これが、近代社会の第一の特徴である。

(2) 都市の意味の変容

そして、人口増加という特徴と深い関わりを持ちながら、都市の持つ意味が大きく変容するのが近代の特徴である。近代以前の都市は、城郭・城壁都市である。そこでは、都市内部に支配者が住み、都市の外側に被支配者が住むという階級関係が居住地によって分かれていた構造をとっており、しかも、都市内部は消費の場、都市外部が生産の場として、その機能も分かれていた。また、都市は多くが森林資源の近くに建設されていた。これは、都市が使うエネルギーが森林資源であったことを意味している。

しかし、石炭をエネルギー源として、蒸気機関が発明され、大規模な機械を動かしてものを生産するという産業革命が起こることで、エネルギーの転換が起こり、しかも、大工場生産様式が普及して、工場が各地に造られることで、そこが人口の集中する都市へと変貌することになる。しかも、この工場に、増殖する人口を抱えた農村から大量の人々が労働力として働きに出、工場周辺に居住することで、スラム街が形成されるようになる。その上、工場は各地に造られることで、人々は工場に通う、通勤する形態をとりながら、その居住地と工場との間を、大量にうごめくことになる。こうして、都市はどこが中心であるのかが曖昧になる。しかも、人々はこの都市の中をうごめき合うことで、互いにふれあい、衝突し合う中で、自分も彼も彼女も、誰も彼もが同じ人間であることを認識していく。

ここにおいて、都市は、その居住地によって階級が明らかになるような構造をとることをやめ、エネルギーを消費して製品を作り出す生産基地であり、その中に住む人々を、農村的な結合から切れた孤独で自由な労働者でありながら、互いに同じ人間であるという感覚を共有した人々であるように形成することとなる。こうして、従来の階級関係は、人々の感覚として、都市においては存在することをやめ、それに代わって、平等感覚が生まれることとなった。このような感覚を共有しつつ、相互に孤独な人々の群れを「群衆」と呼ぶ。

また、人々は自分の住んでいるところと工場との間を通勤するようになることで、職住の分離が始まり、それが働く場所＝公、生活の場所＝私という公－私の分離の感覚をも生

み出すこととなった。

群衆の誕生と都市の意味の変容、これが、近代社会の第二の特徴である。

(3)新しい消費空間

産業革命後の大量生産・大量消費社会の出現は、消費空間のあり方も変えていった。それまでの市場に代わって、デパートが誕生した。デパートは、この新しい社会に対応して、これまでにない画期的な性格を持っていた。それは、①定価商法、②パノラマ空間、③誰でも入れる空間、④買わなくてもよい空間などである。

とくに、これらの特徴は、基本的に売り子と客との間に人間関係が発生せず、売り子は客を誰でも同様に扱うことが可能になること、しかも、誰でもが気楽に入れて、買わなくてもよく、全世界から集められた物産に触れて視野を広げることができるなど、都市の変容＝平等感の形成をさらに促す作用を持っていた。誰でもが、デパートという場所においては平等に扱われ、お金さえ払えば、誰でもが欲しいものを、しかもこれまでの社会であれば高価で手が出なかったものを、廉価で購入することができるようになった。

このような消費空間と消費行動の出現によって、消費という面においても、人々の間で平等という感覚がさらに広がることになった。

(4)ぜいたくの民主化

ここから新しい社会現象が起きるようになる。いわゆる、「ぜいたくの民主化」という現象である。大量生産・大量消費の時代を迎えて、デパートなどの新しい消費空間が普及するようになると、廉価で高品質な量産品が市場の拡大競争にともなって大量に市場に出回るようになり、それがさらに品質の向上と価格の低下を促し、それがまた人々の購買意欲をそそり、市場が拡大するという循環ができあがるようになる。

このことは、今日でも日常的に起こっていることである。たとえば 40 年ほど前の家電品の三種の神器(テレビ・冷蔵庫・洗濯機)やその後の 3C(クーラー・カラーテレビ・自家用車)の購買ブームや昨今の携帯電話の急速な普及やモデルチェンジの速さなどにそれは象徴されている。

この過程で、従来であればそれらのものを持つこともできなかった人々が、それをごく当たり前のようにして持ち、使うようになる。ぜいたくが民主化していくようになるのである。それは、たとえば、携帯電話が今や高校生の必需品であり、親のすねをかじっている子どもまでもが携帯電話を持ち、使っていること、しかもそれが 10 年ほど前までは、機械の購入だけでも 10 万円以上もしたことを思い起こせば、いかにぜいたくになっているのか、いかにものが安くなっているのか、一目瞭然であろう。

(5)外面の消費

このようなものの急速な普及は、さらに「ダンディズムの通俗化」という現象を生み出すようになる。ダンディズムとは、簡単に言えば、貴族社会に属する一部の人々が、その社会のしきたりやきまりを批判し、その反骨精神を形に表し、新しい社会をつくろうとするひとつの運動であり、その表面化されたものが、貴族社会で流通している服装・髪型・立ち居振る舞いへの反抗と新しい服装・髪型・立ち居振る舞いの主張であった。これは、貴族にはなれない平民から見て、かっこいいことであり、憧れでもあった。この運動のことをダンディズムといい、その主体をダンディな人と呼んだ。しかし、それは、平民にしてみれば、外面的なかっこよさとして取り入れられ、外面がかっこいい人をダンディと呼

び習わすようになっていく。外面が消費されるようになるのである。

しかも、上記のように大量生産の時代には、このダンディズムの服装や髪型までもが生産と消費の対象になっていく。デパートには、ダンディな人々が着ていたであろうかこのいい服が安く大量に出回り、髪型も理髪店で流行のものを手に入れることができる。まさに、これを身につけ、この髪型にすれば、「これであなたもダンディ」なのであった。

こうして、ものが普及し、大量に消費され、ぜいたくが民主化することで、人々は外面こそに意味があるような錯覚を共有することになる。

本来的にはダンディズムとは内面の精神の運動であり、その表現としての外面があったはずであるのに、いまや外面こそが重要であり、外面を真似、外面を取り繕うことで、人々はダンディとなると考えるようになる。

ここにおいて、形の消費が生まれ、それは、その形を受け入れていないと自分が不安になるという感覚へとつながっていく。三種の神器を持っていない自分は他人と較べて惨めなのではないか、変なのではないか、携帯電話を持っていない自分は友達と較べて変なのではないかという、いわゆる集団の同調圧力が加わるようになるのである。こうして、市場は人々の他の人と同じでありたいという欲望を基礎に、拡大していくようになる。

そしてそれがまた、人々の平等観、同じ人間だという感覚を強めることになった。

2. 人間一般の成立

(1) 分業の労働観

消費によって人々が同じ人間なのだという平等感覚を強めていくのと同時に、また労働における新しい形態においても、自分は他人と同じ人間なのだという感覚が強められることになる。産業革命以後の大工場生産様式が採用したのは、分業という労働の形態である。分業とは、ひとつの製品の生産工程を単純な労働の集積へと分解し、その単純な労働を一人の労働者が担う、つまり多くの労働者が一人ひとつの工程を担うことで、ひとつの製品がその工程の集積として完成するという生産の仕方＝労働の形態である。

そもそもこの分業という考え方そのものが、労働者は働く能力としては誰もが同じなのだと思なす考えに基礎をおいている。つまり、人間は誰でも同じであり、誰でも同じように働けるのであれば、特別な訓練なくして誰でも就労できるようにすべきであり、誰でも仕事ができるまで仕事の内容を単純化してやれば、誰でも労働者になることができるという考え方である。こうして、老若男女だれでもが働ける労働の新しい形ができあがることとなる。

この分業においては、人間は誰でもはたらくことができる力を持っており、そうであるが故に、特別な訓練なくして誰でもがはたらくことができるという感覚を人々の間に広めることとなった。これがまた、人間として同じなのだという平等感覚をさらに強めることとなった。

(2) 人間一般

以上のような新しい社会において、人々は自分も他人も同じ人間として平等なのだという感覚を強く持つようになる。そしてそれは、たとえば、労働者であれば、自分は仕事をするので賃金を得ているが、それは誰もが同じことであり、仕事ができる＝仕事でしかお金を儲けられないという意味においては、誰もが同じなのだという感覚を強めていく。

しかも、消費においても、お金で欲しいものが買え、皆が持っているものを自分もほしがるようになり、それをお金で購入するということにおいては、誰もが同じなのだという感覚が強まっていく。

ここにおいて、人々の間には、誰もが同じ人間であり、同じように生活し、同じように行動するのだ、われわれは皆同じ人間なのだという感覚がつよく形成されることになる。そして、それが自分を基準にして、「普通」の人間という感覚へとつながっていく。いわゆる「人間一般」の成立である。

しかし、この「人間一般」の概念においては、自分が人間一般であるのかどうか、言い換えれば「普通の人間」であるのかどうか、当の本人によって常に気にされるようになるという逆説が生まれることになる。つまり、自分は普通の人間だから、他の人と同じであるということが前提され、自分が他の人々とずれてはいないかが気になって仕方がないという社会が形成されるのである。上記のように、社会全体が同調圧力を持つようになる、言い換えれば、個人が自分に対して集団への同調を強いるようになるのである。

ここから、普通の人間とそうでない人間という区別が、平等を前提とする社会において立ち上がってくることとなる。

(3)新しい差別＝排除の成立

この普通か普通でないかという新しい区別は、差別へと展開する。つまり、自分が生まれてからの努力ではどうしようもなかった階級や性別、人種などという差別は、新しい社会においては皆同じ人間なのだとして廃止される方向に向かうが、この旧い差別に代わって、普通か普通でないかという新しい差別が生み出されることになるのである。

それは、この新しい社会においては普通の人間ははたらくことができ、誰もが同じように生産の従事することができるが、その中に、その誰でもできることができなかつたり、労働のルールに従わない人々がいることが経験的に知られていたためであり、そうした人々を生産へと組み込まないことが求められるようになるのである。これが、普通か普通ではないかということであり、それを早期に発見し、生産に組み込まないようにするために開発されたのが、心理テストである。ここにおいて、人間は平等なのだとされた人間観が排除という新しい差別をもたらすことになった。

(4)新しい序列化へ

しかも、このような差別は、たとえば、キリスト教に見られる人間観を反映していた。キリスト教のとくにプロテスタントは、人間には神が等しく理性＝ **reason** を与えているが故に人間は人間として平等であるが、その理性＝ **reason** を現実の世界において実現しようとする悟性＝ **understanding** において違いがあるが故に、現実の人間の存在のあり方には違いがあると考えた。ここにおいては、人々は神から理性を与えられているが故に、誰でも同じように考え、同じように行動するが、その同じように考え、同じように行動することにおける差異が生じているのは、自分の理性をよりよく発揮して、悟性として表現し、この世界を神の世界に似せてつくろうとする力の発揮の違いがあるが故に、現実世界における人間の価値が異なるのだと解釈されることになる。

このような人間観においては、人間の持つ神が与えた理性は「質」としては同じであるが故に、人間は本質的には同じであるが、その「質」である理性を発揮して神の国をつくらうとする悟性において違いがあるのは、本人の理性の開発の度合いによる違いだとされ

ることで、「量」の問題だとされることになる。

ここにおいて、理性＝質の発揮の度合い＝悟性は、ある社会的な有用性に関する尺度、つまり神の国を実現するために発揮される力を測る尺度をあてがうことで、量化して測ることができ、そうすることで、その人の社会的な価値を計ることができるという感覚が生まれることになる。ここではすでに、固有名詞を持った個人一人ひとりがとらえられる必要はなく、人々は集団＝マスとして処理され、数量的にその社会的な価値の位置づけを与えられるに過ぎないものとなる。

偏差値がその典型である。

3. 発達の登場

(1) 同調圧力と民主主義の背理

これまで述べてきたような均質だから平等だという人間観は、いわゆる人間一般という感覚をもたらし、それはさらに「フツーの人間」という観念を生み出して、人々の感覚を縛り付けるようになる。つまり、自分は普通の人間だから、ほかの普通の人間と同じように考え、行動するという感覚であり、さらにいえば、自分がつねに他人から普通の人間だと認められているかどうか気になって仕方がなくなると言うことである。それはまた、平均的な人間、人並みな人間という感覚と同じである。

ここにおいて、いわゆる集団的な同調圧力が生まれることになる。これは、外部から私たちにもたらされるものであると言うよりは、上記のような、同じ人間であるかどうか気になって仕方がないという、自分の内面の問題として、自分で自分に加える圧力のことであり、この圧力があるが故に、ひとつの集団がいわばひとつのカラーをもつようになる。これが、大きなものとなると、いわゆる国民性となる。

この集団においては、人々は自分が他人と変わらない普通の人間となることが目的とされるために、誰もが普通の人間になる競争をすることとなる。ここにおいて、ある集団に所属する人々の間には、その集団の普通の人間になるための競争が激化し、人々は苦しい競争を繰り返すことになるのに、それを外から見ると、競争している人々は、おなじ普通の人間になること、つまりあるひとつの価値に適応する競争をしているために、その集団はきわめて均質な、画一的な集団であると見えることになる。

こうして、過激な競争と集団の画一化が同時進行し、さらに競争を激化させ、集団を画一化していくという循環が形成される。

しかも、この集団内においては、その結果、いわゆる「民主主義の背理」という現象が起こることになる。民主主義の基本は、すべての成員が自分の意見を持ち、議論を重ねることで少数意見にも配慮しつつ、より多くの人々がそれでよいと一応の落ち着きどころを得る、つまり「公論」を得る作業を重ねつつ、その集団の意思決定をより高度化していくという点にある。そして、この背後には、すべての成員は、人間として同じであり、自分の幸せを他人の幸せに重ねて考えることができるが故に、議論を重ねることで、合意を得ることができるようになるという人間観である。

しかし、この人間観は、これまで述べてきた普通の人間と同じ構成をもつために、議論を前提とする民主主義制度にあって、他人と異なる意見を言う自分は、その集団からは普通の人間と見てもらえないのではないかという怖れを、各成員にもたらすことになる。こ

これから、一人ひとりの成員は、他人の出方を見ながら、自分の意見を修正して、他人に同調しようとする行動をとることになる。いわば、集団の同調圧力が、個人の内面において働くことになる。こうして、民主主義は、単なる多数決の場へと変わってしまう。人々は、自分が普通の人間であるために、自分の意見を言うのではなく、他者の意見を自分の意見であるかのように受け入れ、それを表明することで、多数に就こうとすることになる。

こうして、民主主義は機能しなくなる。人間が均質で平等であるからこそ可能になる民主主義が、その原理によって機能しなくなるのである。これを民主主義の背理という。

(2) 排除の論理

このような集団の同調圧力が働く場においては、普通の人間であることこそがもっとも重要な価値であることになる。このような観点からは、すべての成員は均質で平等だとされることになるが、実は、経験的に、このように均質で平等ではない人々の存在が知られていた。それは、端的に、子どもと障害者である。

そして、この均質ではない人々を早期に発見して、均質で平等な集団に入れないことを目的にして開発されたのが、いわゆる心理テスト・心理測定であった。今日では、この心理テストは、障害者を早期に発見しつつ、治療したり、ケアしたりする方向で使われているが、本来的には、一見普通に見えるが普通ではない人々を早期に発見して、排除することを目的に開発されたのが、心理テストであった。その典型は、知能テストや職業適性検査であり、就学前の子どもや就職を控えた青少年に対して行われてきた。

このような排除が可能になるのは、普通の人間という観念が社会的に成立しているからである。

(3) 発達の登場

しかし、排除の論理をつきつめていくと、たとえば社会の中で大きな集団をつくっている子どもたちを社会的に排除することになり、その集団の維持が困難となることになる。しかも、子どもたちは、成長すれば、おとなと変わらない普通の人間になることも経験的に知られていた。ここから、子どもが発見されることになる。つまり、おとなとは異なりながら、成長して、おとなになる存在として、子どもが定義されることになるのである。

そして、おとなとは異なるが将来的に同じになるという論理を「発達」という表現で表すことになった。発達の登場である。つまり、今は普通の人間とは異なるが、将来的には、成長、発達して、普通の人間になるという、現在の格差や違いを、時間軸の中で解釈して、子どもたちの存在をおとなの論理の中に組み込もうとする考え方である。

この発達の論理を使うと、これまで述べてきた均質で平等な人間は、相互にひとつの尺度で較べることができ、それが新たな序列につながるようになるが、それは発達の違いという時間軸の中での格差として解釈されることになる。しかも、それはまた、発達が早いと数値が高く、発達が遅いと数値が低いということになるが、しかし、それは発達という時間の問題なので、人間としては、そのうち皆が一緒になるか、今発達が早い人の到達点に、遅い人も到達するのだから、人間として同じなのだという解釈に行き着くことになる。つまり、均質で平等な人間という人間観が、ひとつの尺度による序列化で揺らいだところへ、発達が導入されることで、均質で平等な人間という観念が保存されることになったのである。

ここから、問題は、発達の早い遅いということへと展開する。言い換えれば、発達が早

いほうがよいし、遅いことはよくないことだということになる。それが、昨今の早期教育ブーム、つまり一刻も早く普通の人間にしようという競争へとつながっている。

(4) 普通の人間の保存

そして、ここにおいて、障害者も、発達するから人間であり、発達が普通の人よりも遅い人としてとらえられることになる。つまり、障害者は発達が遅いが故に、普通の人とは異なって見えるが、しかし、彼らも発達しているが故に普通の人なのであり、差別をしてはならないという観点が生まれることになる。ここにおいて、均質で平等な人間という観念が、障害者を取り込むことになる。なぜなら、人間の格差は発達の早い遅いによって生まれるものである以上、発達が遅い障害者も、実は、発達が遅いだけであって、同じく人間なのだという感覚が生まれるということである。

しかし、これは、一方で、人間として平等に扱われなければならないという感覚と結びつきながら、他方で、しかし発達によって格差が生まれ、序列化されているのだから、障害者は発達が遅いものとして処遇されればよいのだという感覚をも生み出してしまうことになる。ここでは、異質であるが故に比較することはできず、そうであるが故に序列化してはならないという、異質であるが故に平等なのだという感覚は生まれることはなく、あくまで、均質で平等な人間という観念を保存しつつ、人間を序列化することを正当化する論理が働くことになるのである。

4. カネの原理

上記のような人間を測定し、序列化するという発想は、貨幣の原理と結びついている。貨幣は、モノとモノやモノとサービスの間に介在して、それらを直接較べたら較べられない違う質のモノを、ひとつの価格という尺度で、つまりひとつの量で現す指標であり、貨幣がモノとモノ、モノとサービスの間に介在することで、それらは相互に交換可能となるという制度である。

つまり、本来的に違う質であり、較べることができないモノを、貨幣は、価値として数量化し、価格として表現するという役割を担っているのであり、それは、違う人々を同じだとして表現する人間観と表裏一体の関係を形成している。

たとえば、私たちがアルバイトで1時間800円の賃金をもらうとして、その800円は、私たちの労働の成果や働きそのものについて支払われているものではない。それは、私たちがもつ労働力という能力を、誰でもが同じ力を持っているはずだとして査定されて、評価されたもの、言い換えれば、労働力という能力の価値が価格として表現されたものである。それが故に、私たちは、自分の能力というモノを売って、賃金を得、それと使ってほかのモノと交換＝そのものを購入することができる、つまり、自分の能力とモノとを同じ価値であるとして交換することができるようになるのである。ここでは、私たちの能力とその購入したモノとは、質的に較べることなどできないのにもかかわらず、価値的には同じモノだと評価されて、量化されて表現されているが故に、交換が可能となるということになる。

しかも、私たちが1時間800円であると評価するのは、私たちがもっているあらゆる能力を評価してのことではなく、ある一面の、ある職種において働ける能力だけが評価され、査定されることで、その価格として表現されているに過ぎない。が、それはまた、既

述のような、人間観を背景にもっていて、社会がそのようにつくられているが故に、その一面だけで評価してもよいということになる。

5. 交換可能態としての人間

こうして、すべての人々は、その人のもつ固有の質を考慮されることなく、あらゆる人々と交換が可能となる。言い換えれば、ある単一の尺度で測られて、その結果がある数値や量として表現されることで、均質で平等な人間のあいだに序列が持ち込まれるが、それは発達の速度の違いであり、その時点時点では、数値や得点の高い人の方が有用性が高いのでより高い賃金や地位が与えられるが、その他の人々も同じように発達するのであるから、よりよく発達した結果、さらに高い評価を得ることは可能だという論理が社会を支配するようになる。

ここでは、すでに人々は一人ひとり固有の価値を持った人ではなく、ある尺度をあてがってやれば、相互に比較可能な価値を発達によって増やそうとしている存在として、扱われることになる。一人ひとりの価値は、量の違い、または得点の違いとして解釈される。そうであれば、人々は、その得点が高い方が価値が高いので、他の人との交換可能性がより高くなる、言い換えれば、得点の低い人は価値が低いので、価値の高い人にとって代わられてしまうが、価値の高い人はより多くの人と交換可能であるが故に、その人固有の価値は一層とらえられなくなってしまうということになる。

こうして、私たちは、この社会にあっては、一人ひとり固有の存在として扱われるのではなく、ある測定可能な価値を発達によって伸ばそうとしている、ある時点において、その価値の多い少ないがある、しかしそれは発達の時間的な違いに過ぎない存在としてとらえられ、ある時点において序列化されつつ、他者と交換可能な状態へと形成されてしまう。

これが、私たちの生きてきた近代社会の特質である。

6. 言語と国家・市場

(1) 国語と国家・市場

これまで述べてきたような均質で平等な人間という人間観を制度化したものが、近代国家であるといつてよい。近代国家は、また近代国民国家と呼ばれ、さまざまな定義はあるが、一般的には、単一の言語によって統一されている国家のことをいう。

この国民国家は、基本的には、これまで述べてきた人間観を発生させた経済的な発展の必要を背景にもって形成されている。つまり、経済発展のための大きな市場の形成と、単一の価値を持った労働力の育成を基本的な課題として構築されたのが、国民国家というものである。この意味では、国民国家は、経済装置としてつくられているといえる。

ここで言語が重要な役割を演じることになる。なぜなら、私たち人間は、言語的な生き物であり、自らの感覚や感情など一人ひとり個別の問題も、すべて言語化されることで、私たち自身に認知され、自覚されるからであり、言語を共有することで、他人とその感覚や感情を共有できると考えるからである。そして、そうすることで、自分はその言語を話す人々と同じく人間であり、価値観を共有する仲間なのだという感覚を強く持つことになる。これが、国民国家の基礎である。

それ故に、経済装置としての国家は、成立と同時に、その領土内にいる民衆の言語を統

一して、彼らに同じ言語を話し、書き、読む、おなじ仲間＝国民なのだという意識を抱かせようとする政策を採用する。ここで、統一言語制定の必要、つまり国語の制定の必要が生まれることになる。

現在私たちが用いている国語は、自然発生的な言語ではなく、国家が制定した人工言語であり、それを民衆すべてが用いることで、民衆は同じ国語を話す国民であるという感覚を共有し、自分がその同じ言語を話す集団に所属しているのだという気持ちを強くすることになる。こうして、民衆は国民としての自覚を持って、一つの言語集団＝国家に所属する自分を意識することになり、国家のまとまりが強化されることになる。

しかも、一つの言語を共有することで、人々の感覚が統一されるために、大量生産される少品種の製品が、国内市場で大量に売れることになり、かつ、それを生産する労働者の価値観も同じく統一されているために、品質の安定した、大量の製品が生産されることになる。

(2) 国語と国民

国語は、まず、経済的な必要から国家によって制定され、民衆を国民化する道具として民衆に強制された。その結果、民衆が日常的に使っていた地域語＝生活言語が駆逐され、国家語＝国語が民衆相互の間をつなぐ道具として使われることになった。後述するように、この言語を使った国家形成に最もよく成功していたヨーロッパ列強の国はフランスであり、それが故に、日本はその近代化の過程で、フランスの学校制度に範をとった学校制度を導入している。フランスでは、フランス語の制定と学校を通じた普及は、地域語の駆逐の歴史であったとされている。

ここで重要なのは、この国語の制定と普及が、これまで述べてきた人間観、つまり誰もが人間として同じで、だからこそ平等に扱われる必要があるという感覚と、だからこそ誰もが普通の人間なのだという感覚を、国民というまとまりとして実現するものであったことである。国語が普及し、誰もが国語を使って相互に意思疎通できるようになると、人々は自分はその言語集団＝国家に所属する構成員＝国民であり、同じく国語を話す他者も同じ国民なのだという感覚、言い換えれば、たとえば同じ日本人だという感覚が生まれる。それと同時に、その国語を話さない人々に対しては、その集団に属さないよそ者であるという感覚をもつことになり、国家という枠組みがより強固になるとともに、その枠組み内部では人々は平等であるという感覚、普通であるという感覚に支配されることになる。

7. 学校と学校化社会

(1) 学校の役割

このような国語を普及し、国民を形成するための制度としてつくられたのが学校である。日本が明治維新後、ヨーロッパ列強に倣って近代国家を作る過程で注目したのは、強い国家意識を持ち、強力な産業を形成していたフランスであった。

明治維新前後の識字率を見てみると、日本は、江戸末期に寺子屋などの発達があり、江戸（東京）で男性の識字者 86 パーセント、女性のそれ 30 パーセント、全国平均でも、男性 56 パーセント、女性 15 パーセントと、世界的に見ても極めて高い率を示していた。このような識字率の高さが日本の近代化に有利に作用したことは疑い得ない。しかし、寺子屋での識字教育は、民衆の個別の必要に応じた教育の結果であり、一つの国語を制定し

て、国家をまとめ上げるためのものではなかった。

そこで、明治政府が目にしたのがフランスで国語を普及するに威力を発揮していた学校制度であった。日本は、早くも 1872（明治 5）年にフランスに範をとった学校制度を導入している。

このとき採用された考え方が、「立身出世主義」であった。

(2) 学校と民衆生活の向上

日本政府は、近代学校を普及するにあたって、それを民衆が自ら利用して、積極的に学校に上がり、学校が普及する手だてを採用した。それが、「立身出世主義」である。これは、学校に上がることで、学校の成績というただ一点のみにおいて、格差が出る、言い換えれば、出身階層や地域に関わりなく、学校でいい成績を取りさえすれば、学校体系をあげて、将来よい生活が待っているという制度をつくり、民衆がその制度を利用することで、自分のまたは自分の子ども世代の生活向上を実現しようとするを促そうとするものであった。

その結果、民衆は、学校制度を利用し、より積極的に国民化され、国家はよりよく民衆を国民化して、国家としての枠組みを強化することに成功することになった。

このような制度の作り方もまた、これまで述べてきたような人間観、つまり同じ人間であり、均質であるが故に平等に扱われる必要があり、すべての人々に同じ条件が与えられるのであれば、一つの尺度で測ることで、人々の間の格差を示すことができるという観点にもとづくものであった。学校が、現在でもきわめて強い平等観を持ち、平等であることを必要とするのは、その制度がこのような人間観にもとづいて形成されているからである。

(3) 学歴社会と学校化社会

学校制度がこのような思想にもとづいて構築されることで、民衆は学校を自らの生活向上のための道具と見なして利用しようとする。そうすることで、民衆は学校において自らの意思で学校を使い、自らの意思で上昇の競争を進め、自らの責任で競争に失敗して淘汰されるという感覚を身につけることになる。ここから、より高い学歴をつけることが、将来のよりよい生活を保障することになるという感覚が人々を支配することになり、進学競争が激化することになる。学歴社会が、必然的に形成されてくることになるのである。

たとえば、それは、戦後 1960 年代半ばから 70 年代半ばにかけて繰り広げられた高校全入運動に典型的に見られるものである。人々は、社会的に高校レベルの学歴が必要であると見なすと、高校までの学歴を保障するように国や自治体に働きかけ、高校進学率を 1960 年の 56 パーセントから、70 年の 84 パーセント、そして 80 年の 94 パーセントへと一気に上昇させることになったのであり、それを背景として、さらに大学進学率が急上昇する時代を 70 年代に迎えることになるのである。

こうして学歴社会が形成されてくると、社会は次第に学校化されていく。つまり、家庭の中で親や保護者が自分の子どもの学校での成績に一喜一憂するようになり、子どもを学校の成績で評価するようになり、社会的にも、学歴や出身学校でその人の資質を評価するようになる社会が生まれることになる。これを、学校化家庭・学校化社会という。

しかも、この学校化家庭や学校化社会にも、既述のような人間観がからみついている。つまり、学校に行くことが当然の社会であり、人々が学校に行くことを当然と見なす社会であるが故に、普通の子どもであれば学校に行っていることが普通であり、学校に行かな

い子どもは普通ではないという感覚が社会的に生まれることになるのである。言い換えれば、学校に行かない子どもは「ダメな」「いけない」子であり、社会的には社会一般の普通の感覚、通念からはずれた子どもだという見方が成立することになる。これが、近年の不登校の子どもたちを苛む、しかも彼ら自身をもとらえて放さない、社会的な観念となっているのが、現在の状況でもある。

(4) 立身出世教の伝道師＝教師

そして、このような社会が成立することで、人々の間には学校信仰とでも呼べるような心理状態が生まれることになる。そしてそこでは、教師は、立身出世教の伝道師的な位置づけを得ることになる。教師の言うことは絶対であり、教師の言うことに従っていれば、将来の立身出世は保障される、言い換えれば、子どもの生殺与奪の権を握る者として、教師が位置づけられることになるのである。

(5) 国家の意図と民衆の欲望を結ぶ学校

このように、学校制度は、国家が民衆を教育して国民化し、経済発展を遂げようとする目的と、民衆が自分の生活を向上させ、よりよい生活を得ようとする目的と、この二つを媒介しつつ、良好な循環を創り出すための制度としてつくられているのである。そして、この学校を支えている原理が、これまで何度も述べているような、均質で平等であるとする人間観である。それが故に、学校においては、子どもたちは、一人ひとり違った存在として扱われるのではなく、集団として扱われ、しかもその集団の一人ひとりとはほかの誰かと交換可能であり、その誰かもほかの誰かと交換可能であるとされる際限のない代替可能性のなかで処理されることになる。言い換えれば、Aちゃんは、学校にとっては、Aちゃんである必要はなく、BちゃんでもCちゃんでもよく、学校が必要としているのは、Aちゃんと同じ成績を取る誰かだということが起こることになるということである。つまり、AちゃんがAちゃんであるのは、学校成績がその点数であるからであって、それはほかの誰かでもよいということにまで、子どもたちは一般化されてしまうということである。

8. 学校と社会的階層の再生産

(1) 頑張ること

学校は、これまで述べてきたような人間観、つまり均質であるが故に平等であり、誰もが人間として同じ力を持ち、同じように扱われなければならないが、またそうであるが故に、ある一つの基準や尺度によって序列化することができるという観点にもとづいて作られた国家の制度である。この制度で最も大切なのは、すべての学齢期の子どもに同じように学校に上がる機会を保障することである。これを、教育機会の均等原則という。

この教育機会の均等原則の中で、人々は、学校を通して、自分の生活の向上を図る競争に自分の意思で参加しているような感覚を持つことになる。それが、人々の家庭や社会を学校化し、人々の観念を学校中心のものにしてしまい、学歴社会がつけられることになる。

学歴社会を支えている前提は、誰もが人間として同じであり、学校という制度は、その同じである人間が、すべて同じ条件を与えられ、唯一、学校の成績という成果によって、序列化されるという感覚・見方であり、しかも、その学校の成績は、努力によって決まるという考え方である。それが故に、人々は、自分の子どもに学校で頑張るようにけしかけることになるし、学校の教師も、頑張ることに重きを置くことになる。

これを、学校における「努力主義」というが、それはまた「ガンバリズム」と揶揄されることになる。

(2) 学校による階層の再生産

しかし、近代学校をもつ社会において、学校がこれまで述べてきたような平等な人々の間に、生活向上の競争を仕掛けてきたが、その結果は、必ずしも平等な競争の結果にならないことが指摘されてきている。たとえば、アメリカではすでに 1970 年代に、学校制度を通して、社会的な階層の再生産が起こっていること、つまり親とくに父親の世代の社会階層が子どもとくに男の子の社会階層へと相続されていることが社会学的な調査で明らかにされている。また、日本でも、SSM 調査（社会階層の安定と流動に関する調査）によって、とくに 1970 年代以降、父親世代の社会的な階層とくに職業階層が子世代の 40 歳の時の職業階層へと世襲される傾向が強まっていること、つまり社会階層の流動性が極度に狭まっていることが明らかになっている。ある調査によれば、すでに 1970 年代の時点で、父親と子どもの社会階層＝職業階層の相続・世襲の傾向は、大正時代と同じほどに閉じられてきている、つまり日本社会が階層の流動性を失ってきていると指摘している（佐藤俊樹）。

そして、アメリカでも日本でも、このような社会階層の再生産が、学校教育を通して行われていることが明らかになっている。この意味では、学校制度は、人々の平等で自由な競争を保障し、唯一、努力の結果によって社会階層を上昇したり、下降したりする、平等な制度ではなく、すでに社会階層の固定的な再生産を行う不平等な制度であることが明らかになっている。

(3) 学校は何を選抜してきたのか

では、学校は何を選抜して、階層の再生産を行ってきたのであろうか。この点については、大きく 3 つの観点が存在する。1 つは、各家庭のもつ社会階層とくに経済階層を選抜してきたのではないかという説。つまり、家計が豊かであれば、早くから子どもに十分な教育費を支出することができ、早くから家庭教師や塾に通わせ、教材を準備し、個室を与えるなど、学校における成績を上げる競争に有利な条件整備を行うことができる家庭の子どもが結果的に学校において選抜され、有利な条件の中で、その子どもたちが、親の階層を相続するように再生産されているのではないかという考え方である。たとえば、東大生の家庭の平均年収は、すでに 1000 万円近くであり、日本全体の平均年収が 500 万円前後であるのと較べて、格段に高い階層の子どもたちが東大に入学していることが、このことを傍証している。

2 つは、親の資質が子どもに遺伝しており、学校はこの資質を選抜しているという説。とくに心理学的なテストを行うと、親が学校になじみやすい資質、とくにコツコツと努力し、よい成績を得ることに喜びを見出すような心理的資質を持っていると、子どももそのような資質を持っていることを示す傾向が強く、学校はそのような遺伝的資質を選抜し、そのような学校や受験になじみやすい子どもたちを選抜してきているかのように見える。そして、それは、その社会が求める遺伝的資質を持つ人材を選抜しているが故に、選抜された子どもは高い地位につくし、その子どもも同様に高い地位につくようになるというものである。

3 つは、上記 2 つに対して、さらに各家庭のもつ文化を選抜してきているという説であ

る。これは、社会学的な知見からもたらされたものであり、上記1. 2. の説を含み込んで成立する考え方である。どういうことかということ、学校は、各家庭のもつ学校になじみやすい文化を選抜し、そのような文化で育った子どもをより高い社会階層にリクルートしていつているのではないかということである。

つまり、親の世代が配偶者を選抜する時点ですでにそこでは文化的な要因が作用しており、一般に学歴社会では、同じような学歴のもの同士が結婚する確率が高い。そうであると、その男女がつくる家庭は、子どもが生まれる以前にすでに学校や受験になじみやすい文化をもった家庭として形成されることになる。なぜなら、その男女自身が学歴社会においては勝者であり、すでに学校になじみやすい文化や資質を持っているからである。そこへ、子どもが生まれると、その子どもは好むと好まざるとに関わらず学校になじみやすい文化の中で自己形成をはじめることになる。

そして、ここにもし遺伝的資質が関わっているとすれば、その子どもは遺伝的に学校になじみやすい資質を持ち、それが学校になじみやすい家庭文化の中で強化されることになる。また、その家庭は、学歴社会においては、経済的に高い階層にあるのが一般的であり、そうであれば、その子どもは、学校になじみやすい家庭文化の中で、早くからさらに学校になじむような教育が強化されることになる。

こうして、その子どもは小学校に上がる前にすでに学校になじみやすい子どもとして形成される。そしてそれが、学校に上がってから「よい子」としてその子の行動を決めることになり、学校で有利な立場にその子を立たせることになる。

このように見てくると、学校は、家庭の経済的な地位や遺伝的資質を含み込んで、家庭のもつ文化を選抜し、再生産する形で、家庭の社会的な階層の再生産を行ってきたことがわかる。そして、それは、すでに個人の努力を超えたものとしてあるが故に、学歴社会・学校化社会においては、努力してもしがいのない社会、または努力する気さえ起こらない社会が作り出されることになる。

学歴社会は、平等を原理とする競争社会ではなく、すでに決まっているものを決まっているように選抜する不平等な制度だといえる状況になっているのである。

(4) 主流文化と学校

一般に、学校はその社会の主流文化を子どもたちに身につけさせるようにカリキュラムが組まれているといわれる。つまり、戦後の日本社会であれば、戦争に懲りて、平和な環境のなかで、人々の生活向上を実現し、そうすることで国が安定的に形成されるように、経済発展を担い、国民であるという強い意識を持った人々を育成することが学校の基本的な目的となったということである。ここに、言語＝国語が重要な役割を果たしたというのは見てきたとおりだが、その他の教科内容も、基本的にはこのような観点から編成されていた。

たとえば、歴史。皆さんは、日本は稲作国家だという観念を強く抱いてはいないだろうか。とくに、日本という国は、古来から単一民族国家で、人々は稲作に従事し、懸命に生産力を高め、近代社会に入ってから、殖産興業にいそしみ、コツコツと頑張り続けて、今日のような発達した経済をもつ国を作り上げてきた、このような感覚や観念を持っていないだろうか。言い換えれば、とても静かで安定した、生産にいそしむ人々で構成されている国、という感覚がどこか身につけていないだろうか。それに対して、たとえば、弥生

人が稲作をもたらしたことは知っていても、その前の縄文人を殺して、駆逐したことや、日本には古来から、稲作に従事する人以外に、流通業や芸能民など、全国を渡り歩く人々がたくさんいて、日本社会はもっとざわざわして、もっと賑やかだったという意識や感覚はないのではないだろうか。そして、戦前では、日本が単一民族国家などという観念すらなかったことも。

戦前の日本は、台湾や朝鮮半島を植民地化していたので、同じ「日本人」でも異民族がいたことは当然であったし、「大東亜共栄圏」を建設するためにも、日本人がアジアの指導民族で、単一民族を志向しているというイメージはマイナスであった。その意味で、日本は「万世一系の天皇」と「多民族性」とのあいだをうまくすりあわせるような論理を懸命に作り出そうとしてきた。

戦後になって、日本は植民地を失い、海外への侵略を自ら否定し、かつ国民が戦争に疲れ、戦争を忌み嫌ったことと、生活向上を求めたこと、さらには国家の再建のために経済復興とその後の経済発展が求められたことなどが重なって、戦後の日本の歴史学は、マルクス主義の生産力史観にもとづく一国の発展史へと大きく展開した。それが、経済発展を求める民衆の欲望や国の必要と重なるとともに、一つの集団に帰属して、生産力を高めるためにコツコツと勤勉に働く労働者を必要としていた企業の必要と呼応して、上記のような瑞穂の国＝稲作国家の歴史イメージが作り上げられ、学校で教えられることになった。

このことはまた、社会全体が求めている文化のありようでもあり、かつ企業の管理職層が持っている文化の形でもあった。それを皆さんは受け入れて、今日に至っているといっ

てよい。

だからこそ、今日、従来のような産業社会からの転換が進められている日本では、上記のような歴史イメージのみが学校で教えられるのではなく、網野史学が提唱したような、流動する人々や生産しない人々のことが学校で教えられ始めている。

(5) 学歴社会が壊れる時

今日、学歴社会が解体する時代がやってきている。それは、学歴社会または学校という制度が、どのような社会において形成されてきたのかということと深い関わりを持っている。これまでの講義の内容で明らかのように、学校という制度は、近代産業社会とくに分業が社会的な生産様式として確立してきた社会において、その分業に人々を参加させ、かつ広い国内市場を作り出すための制度として作られたものであり、その基本は、均質で平等な人間という観点であった。しかし、今や社会的な生産は、これまでのような大量生産・大量消費の時代を終え、分業による廉価なものの大量生産から、各個人異なる欲求にもとづく、多品種少量生産へと転回しており、さらに製造業中心の社会から、人が人を扱う知識社会へと大きく展開しているのであって、このような社会においては、これまでのような人材の選別では社会経済が成り立たない時代がやってきているのである。

言い換えれば、これまでのような社会の主流文化を再生産していたのでは、社会が成り立たない時代に入り、社会の主流を占める文化が変容を来しているのであり、その中で、社会的に選抜されるべき文化をもった人＝選抜されるべき対象も変化を来しているのである。このような時代の大きな変化の中で、学歴社会が徐々に解体をはじめている。

これからの知識社会において、どのような人材が必要であるのか、いまだ定まった基準がない今日、少なくとも子どもを早期から選別するのではなく、すべての子どもたちに基

本的な学力と自己表現能力、そして受験やテストによって中断されないような、自分の潜在能力を発揮する機会と時間の保障が求められている。

しかし現実には、この逆の方向に動いている。やる気の格差＝インセンティブ・ディバイド(荻谷剛彦)によって、やる気を失った層が学校から自ら降りることでその自尊心を保全しようとするような、ネガティブ・フィードバックが作用して、社会はますます一部の人々を固定的に選抜するようになってきている。格差は学校によって縮小するのではなく、拡大しているのが現実であり、学歴社会が壊れることで、それはますます階層の再生産を進める固定的な制度として機能するようになってきている。

9. 近代的工場の倫理

(1) 時間と身体の管理

分業体制を基本とする大量生産・大量消費の様式を採用する近代産業は、これまで述べてきたように、人間は均質だからこそ平等に扱われるべきであり、そうであるからこそ一人ひとり異なった存在としてではなく、集団＝マスとして扱うことが可能であるという観点によって、構成されている。そこでは、大量に画一的なものを消費する消費者と、それを生産する労働者とは同じ人間として扱われる。この経済の論理を拡大して形成されているのが、国民国家、つまり民衆を国民へと形成して、強い国民意識によって支えられている単一市場としての国家であった。

そして、このような労働者であり消費者である国民を育成する場が、学校であった。学校では、民衆の時間と身体を管理することによって、このような労働者であり消費者である国民を育成することが試みられてきたし、今日も続けられている。

たとえば、小中学校、さらには今日では大学でも、授業時間と休み時間とを分けるチャイムが鳴るが、このチャイムは、工場で用いられて、それが学校に導入されたものである。とくに、日本の学校では、この授業時間と休み時間との区切りは厳格に運用されており、欧米諸国では、小学校低学年では1時限50分であっても、柔軟に、15分や20分など、子どもたちのその時々状態に合わせて組み換えられているのに対して、日本の小学校では、1年生からほとんど1時限45分が厳格に適用されている。そして、この1時限45分のチャイムによる時間管理は、それに子どもたちが慣れてしまうことによって、子どもたちの毎日の生活時間の単位として作用し、かつ彼らに内面化されることになる。言い換えれば、身体が1時限45分、または90分を単位に動くようになるということである。これはまた、工場における労働時間の区切りに対応するものであった。

さらに、この時間の内面化に加えて、身体の構えの改造が試みられることになる。たとえば、今日の学校で採用されている体育の整列・前にならえ・気をつけ・礼・休めなどという身体の形は、軍隊のものを採用しつつ、工場における労働に適した形に組み換えられており、また膝を抱えて座るいわゆる体操座りは、個人の服従を強いる身体の構えを形にしたものである。また、学校で採用されているグループ活動や班活動は、工場におけるチームワークを基本とした労働者の身体の動きを模したものであり、かつQCサークルのあり方を採用したものである。ここでは、子どもたちに工場における生産にとって必要な身体の動きや構えを、内面化しつつ、彼らが自分で自分を管理して、自主的にそのような身体の動きをとることができるようになることが目指されている。

登校時間に行われる校門指導や髪の毛・爪などの検査、持ち物チェックなども、このような身体管理の流れの一環に位置づけられ得るものである。

ここでもポイントは、これらの指導を通して、子どもたちが自発的または自主的さらには無意識とも思えるような仕方で、工場の労働に適した身体の構えと動きを作り出すことにある。

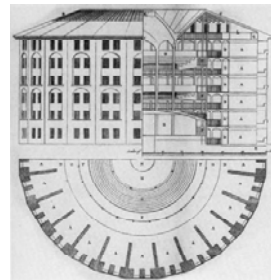
(2) パノプティコン

このようないわゆる外部の規範の内面化とそのことによる身体の構えの改造は、パノプティコンと呼ばれる近代社会のシステムによって、社会全体に拡大されている。

パノプティコンとは、管理の手法であるが、それは、民衆一人ひとりが誰か指導者または支配者につねに監視されているという意識を内面化することによって、その指導者や支配者の意図を自ら感じ取り（自ら指導者・支配者の意図をくみ取って）、その期待に添うよう行動することを目指して作られた、自主管理システムである。

たとえば、学校では、教師が指導者の役割を担うが、教室の構造は、教師 1 に対して子どもたち 40 という関係の中で、教師が 40 名の子どもたちを指導し、支配するために、たとえば、教師対子どもという対面式の関係がつくられ、かつ教師は教壇に立って高いところにおり、子どもは低い位置にいるという上下の関係が作られ、さらに教師の教壇からは子どもたちの手元が見えるという監視のシステムが作られている。この関係の中では、子どもたちは、教師が見ていなくても、つねに教師に見られているという意識を内面化し、教師が求めるような「よい子」を演じようとする。しかも、「よい子」を演じると、指導者であり権威者である教師から誉められるという特典までついている。

この形の典型は、監獄や工場である。近代監獄では、看守一人に多数の囚人という関係が一般的だが、監房は監視室を中心に放射線状に配置されるのが普通であり、相互の監房は互いに仕切られていて見えないが、監房からは監視室が一段高いところに見えるという構造をとる。この構造においては、囚人からは監視室のなかまでは見えず、見えるのは監視室という自らを監視しているであろう看守がいるはずの部屋のみである。ここでは、看守がいようがいまいが、囚人はつねに看守から見張られているという意識を内面化しつつ、過ごすことになる。工場における労働も同様で、監督の部屋は、生産ラインの上高くに設けられており、労働者から内部は見えないが、つねに監督によって見張られているという感覚を労働者に植え付けるようにつくられているのである。



ベンサムの考えたパノプティコン

<http://ja.wikipedia.org/wiki>



パノプティコンの内部



監房からの眺め

<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/johoka/2003/group1/hajimeri1.htm>

近代社会はこのような構造を社会全体に拡大した社会でもあるが、とくに典型的なのは、学校・工場・軍隊・病院・監獄という人間を扱い、人間をマスとして使用する場所で、このパノプティコンが採用されているということである。

ここにも既述のような均質だから平等であり、集団として扱うことのできる人間という観点が反映している。

(3)分業と家庭そして労働の意味

このような管理のシステムは、生産における分業体制に対応している。分業とは、近代産業社会以前の労働の形態である熟練労働、つまり一つの製品を作るために必要なすべての工程を一人が担うという職人的な労働のあり方を否定し、熟練の解体つまり一連の生産工程を単純な作業の集積として分解して、一つひとつの単純作業を一人の人間が担い、その単純作業を積み重ねることによって、一つの製品ができあがるような生産の仕組みをいう。この分業システムにも、これまで述べてきたような人間観が反映している。つまり、人間は均質であるが故に平等に扱われる必要があるとすれば、その均質であるはずの質＝社会的な有用性を誰もがもっているのであるから、その誰もが働けるところまで仕事を単純化＝簡単にしてやれば、それまで高度な技術を必要としていたがために職人にしかできなかった仕事も、とくに何の訓練も受けていない普通の人々にもできるようになり、しかも大量に人々を安く雇いあげることができるという考え方である。

このようなシステムを考え出したのは、アメリカ人のテーラーであった。それ故に、今日の分業システムをテーラーシステムと呼ぶ。テーラーは、この分業システムの採用によって、すべての人々に仕事を保障することができるといい、それまで親方制度をとっていて、親方によって中間搾取されていた労働者を解放するものであるとあって、職場の民主化であると主張した。しかし、この制度は、すべての人々に仕事を保障することのできるシステムではあったが、それはまた、誰でも仕事ができるが故に、その労働者はその人である必要もなくなる、限りなく代替がきく、人々を個人としてではなく、集団として扱うシステムでもあり、そうであるが故に、親方による支配はなくなったが、今度は人々は、誰かと入れ替えられかねないという恐怖つまり失業の恐怖によって管理されることになった。労務管理が出現するのである。

このテーラーシステムをさらに進化させたのが、フォードであった。テーラーシステムは、生産性を上げるのに、労務管理を強化する必要があったが、それでは労働者のやる気を殺いでしまうという欠陥があった。これを補うものとしてつくられたのが、フォードシステムである。これは、テーラーシステムにベルトコンベアを組み込み、流れ作業として組み換えることを基本としたシステムである。この結果、生産性の向上は、労働者に対する管理を強化することによってではなく、ベルトコンベアを調節することによって、労働者に意識されることなく、行われることになった。このフォードシステムは、今日の大量生産の基本的なシステムとして全世界で採用されている。

しかし、このフォードシステムも全能ではなかった。テーラーシステムからフォードシステムへと生産性の向上がもたらされたが、そこでは仕事はより単調に、かつ大量に行われるために、労働者の疲労が激しいのみならず、労働者はその仕事を行うことの意味や自分が働くことの意味を見失い、仕事そのものに興味や働きがいを持ってしまい、生産性が落ちていってしまうのである。言い換えれば、仕事をすればするほど自分が自分ではなく

なるような感覚、自分が誰か他の人でもよいような感覚に襲われることになる。これを労働疎外という。

ここから、家庭が政策的に重視されるようになる。つまり、疲れた労働者を癒し、労働力を回復させ、しかも自分が大変な目をして働くのは家庭や家族のためだと思わせて、自分の労働に対する意味づけを与える場所として家庭が重視され、その家庭における女性の役割が強調されるようになるのである。それは、良妻賢母主義と呼ばれるものである。つまり、良き妻、賢い母として女性が家庭で家事と育児を担当することで、労働者としての男性は、温かい食事と心温まる家族の愛情によって癒され、明日の労働への意欲を充満させると共に、家族のために自分は頑張らなければという気持ちを抱かせることになるということである。この観点から、女性の主婦化が政策的に進められることになるのである。

そして、さらに、このような動機づけの観点を労働そのものに取り込んだのが、トヨタの生産システムである。それは、QCサークルを基本とする改善提案と、職場の人間関係を疑似家族として形成する家族主義としてつくられ、トータル・クオリティ・コントロールと呼ばれるように、職場だけではなく、労働者の家庭にまで管理を及ぼして、労働者の生活全般を工場における仕事にむけて自らの労働の意味を得られるような形に組み換えることを基本とするシステムである。

このシステムにおいて重要なのは、単調な分業における労働にいかにか労働者の能動性を組み込んで、その仕事に労働者自身の意味づけを与えるのかということである。そして、このための訓練が、学校や家庭を通して、社会全体に浸透していたのが、日本という近代産業社会であった。

このように見てくると、この社会、皆さんが生きてきた社会というのは、一体皆さんの何を評価し、何をみてきたといえるのだろうか。端的には、皆さんをある枠にはめ込み、その枠にどれくらいうまく自分をはめ込んできたのかということの評価してきたとは、いえないだろうか。学校が選抜してきたという家庭の文化も、それは子どもにとっては自ら選択できないある意味であらかじめ決められているものであるとしても、子どもたちはその文化のなかに生まれ落ちてきて、それに適応することを求められていく。学校のもつ主流文化とは異なる文化をもった家庭の子どもたちも、学校において、その文化に適応することを求められる。子どもたちは自分の文化を否定しつつ、組み変えて、主流文化に適応しなければならず、だからこそ、うまくいかないときには苦しいし、嫌になる。

このことは、私たちが自分の意思で、自分を表現していると信じて疑わない、このコトバ＝国語においても、同じことなのではないか。コトバは私が誰か他人のものを受け入れて使えるようになったものではなく、ましてや自分のもとからもっているものではなくて、外部のコトバとそれを使うための規則＝文法に自分を当てはめることで、そのコトバを使えるようになったのだといえないだろうか。そして、学校も、私たちのもっている固有のものを評価し、選抜してきたというよりは、私たちがどれくらい学校の持つ価値、つまりこの社会が求めている人間としての枠組みに自分をはめ込んできたのかを選抜して来たのだといえないだろうか。

この社会は、基本的には、適応を求め、適応の度合いを評価する社会であるといえる。そして、だからこそ、学校やこの社会は、旧来の身分制社会と比べて、極めて「平等」な

システムなのだといえる。

第2部 子どもの視点から見る:子どもの存在

1. 人間の生殖の営みと子どもの存在

(1) 子どもを持つということ

私たちが子孫を残す行為は、有性生殖であり、男女が性的な交わりを持つことで初めて次の世代を残すことができる。これを単純に、本能的な行動であるとする見解は、常に生物学の分野から主張され、私たちの身体は遺伝子の乗り物に過ぎないという見方もある。しかし、それが一面で事実であるにしても、たとえば、性欲が性愛として価値づけられ、さらに愛情の問題として意識されるという、人間関係における感情の問題は無視できるものではない。

むしろ、教育学的には、この人間に備わる本能的な欲求を、価値づけ、感情化し、意識化して、それが人間の行動を規定するような、人間の営みへの視点が重要であると思われる。なぜなら、それが、私たちの人間関係における相手への感情や意味づけを規定し、さらに子どもへのまなざしを決めているからであり、さらに、子どもたちは単に肉体を持つだけではなく、精神をもった存在として、人間関係の中に生まれ、その関係に規定されながら、自分の〈ココロ〉を豊かにはぐくむように作られているからである。

この意味では、私たちが子どもを持つということは、単に、生殖行為の結果ではなく、その行為に至るまでの人間関係とさらに妊娠してからも出産するかどうかの決断に反映している、その生殖主体の存在のあり方が問われているということでもある。端的には、愛情を交わす男女が、その二人の間に子どもを持ちたいと感じるかどうかという問題と、子どもの存在とはかかわっているのだといえる。

それ故に、たとえば、私たちが「子どもを作る」という表現をする場合、子どもたちは私たちおとなによって、選択的に作られているという感覚を私たちの心にもたらさざるを得ないし、私たちの社会がそのようにきわめて操作的に子どもを選択していることを示さないではない。そして、それはまた、私たちの子どもに対するまなざしが、そのような、ある種の社会操作的な感覚によって規定されていることをも示している。

(2) 子どもは自分で生殖を選ぶ

しかし、反面、こうした社会関係によって規定されている子どもを持つという行為は、逆に、生理学的な知見によって、子どもによっても選択的に操作されていることが知られてきている。

人間は有性生殖である以上、卵子と精子が合体＝受精して、そこから細胞分裂が起こり、子どもは人間へと成長するが、卵子と精子は出会えば受精するかというとはそうではなく、受精にも何らかの選択が働いているかのようにみえることがあるという。たとえば、人工授精で、成熟した卵子に精子を振りかけても、受精しないことの方が多いのだという。

また、従来、卵子は静止した細胞、精子は活動的な細胞であるとされていたが、最近では、卵子がホルモン様の物質を出して精子をおびき寄せていることがわかっており、そこ

に何らかの選択が働いているであろうことも予測されている。これらの意味では、受精の段階からすでに、おとなの関与から離れて、〈彼ら〉は自らのあり方を決定していると見える側面がある。

さらに、女性の子宮は、自分が作り出した卵子の受精卵でなくても受容し、子どもを育ててしまうことがわかっており（だからこそ、代理母が可能となる）、その意味では、（哲学的には外部の扱いを受けるが）むしろ、子ども妊娠するということは、子ども＝受精卵からその子宮が選ばれたという側面を持っていることが指摘される。つまり、私たちは子どもを作ると簡単にいうが、実は、子どもから選択されて、その子どもを宿している、子どもに子宮を貸しているだけなのだともいえるのである。過去、伝統的ないい方で、子どもを宿した、子どもを授かったといういい方があるが、そのようにいった方が適切である側面が、妊娠するという事柄には存在しているといえる。

私たちは、単なる本能的な行為としての生殖行為ではなく、感情的な交流を基礎にした人間関係に規定される行為としての生殖行為を行っていながら、それはまた、子どもたち自身によって選択された行為でもあるという二重の意味での選択＝規定をうけているのである。

(3) 子どもは子宮に寄生する

その後、受精卵は卵管から出てきて、子宮内膜に着床するが、それはまさに寄生するという表現そのものだといえる。つまり、受精卵からは、絨毛と呼ばれる腕が無数に生まれ、それが子宮内膜に食い込んで栄養分を吸収するようになるのである。そして、それが基本となって、胎盤が形成され、母親である女性から栄養を吸収し、老廃物を捨てるシステムができあがる。このとき、胎児と母親との間には、血液の交流は存在しない。胎盤はまるで熱交換機のように、子宮との間で栄養分と老廃物のやりとりをするのであって、母親である女性の血液が胎児の内部に流れ込んでいるわけではない。

しかも、この絨毛から性腺ホルモンが分泌されることで、女性の身体はその子どもを育て上げることを基本として、そのために必要なあらゆることを保障するように組み換えられていくことになる。

まさに、子どもに子宮を貸しながら、その子どもが成長するための器として、母親の身体は作り替えられていくのである。

(4) 二重の意味での選択

私たちが子どもを持つということ、または子どもが生まれるということは、二重の意味での選択によっている。

一つは、私たちが「子どもを作る」というように、子どもを生む側、生殖をする側の選択問題であり、二つは、「子どもが宿る」というように、子どもの側、生まれる側の選択の問題である。

前者については、たとえば次のように考えることができる。人間には発情期がなく、メスに排卵の徴を社会的に示す身体の変化がないといわれる。言い換えれば、いつでも性交が可能であり、ランダムに妊娠することが可能であるということでもある。このことは、性交と生殖とが直接的な関係にないこと、つまり、性交が生殖のためだけにあるものではなく、ある種の文化としてあることを意味している。これについては、ゴリラの観察記録がある。

ゴリラのオスの子殺しについては広く知られている。従来は、ゴリラは新たに配偶関係になったメスの連れ子を殺し、自らの子どもを妊娠させる、つまり他のオスの遺伝子を持った子どもを殺し、自分の遺伝子を持った子どもを妊娠させることで、自らの子孫を残そうとしているのだと考えられていた。しかし、最近の観察で、乳飲み子を抱えたメスの連れ子を、自分の遺伝子を持った子どもであるかないにかかわらず、殺してしまうことが明らかになっている。これについては、乳飲み子をもつメスは発情しないことから、オスはメスに性交を迫る＝発情させるために子どもを殺すのだとの説が定説となっている。

これに対してメスは、そのヒトへの進化の過程で、子どもを殺させないために、オスの性交要求を受け容れるようになったが、その過程で、自らの発情を隠し、いつ発情し、妊娠するのかをオスに知られないようにしつつ、いつでも性交を受け容れて、子どもの生命を守ろうとしたのではないかと考えられている。

また、同様に、ゴリラの観察で、インセストタブーつまり近親相姦の回避についても、従来は、遺伝子に自らと同様の遺伝子をもった者相互の性交を忌避するシステムが組み込まれているとされていたが、そうではなく、とくにメスの子どもがオスのおとなとの間で世話を焼かれる関係になることで、オスのおとなにそのメスを性交の対象として考慮しない文化的なシステムが働くことがわかってきている。オスが子育てに参加することで、近親相姦が回避されているのである。

これらの意味で、ヒトへの進化の過程で、性交と生殖とが切れ始め、性交をコミュニケーションツールとして用いつつ、生殖を選択するようになったのではないかと考えられている。

その結果、今日のように、社会的な要因(経済的な要因や個人の嗜好の問題など)によって、子どもの命を左右するような出産選択行動がとられるようになったのだといえる。

上記後者の問題は、しかし、生殖は、生殖する側の選択によるものであるとはいっても、そこに、子どもの側の選択が働いているということである。たとえば、精子と卵子とが結合することで生殖がおこなわれるが、最近の産科学では、卵子が精子と選択的に結合しているという見解が示され、しかも、受精卵は子宮に寄生するのであって、それも選択の問題であるにとらえる見方が存在する。

子宮は哲学的・生理学的には外部(外に向けて開かれているもの)であり、そこに受精卵が寄生することで、妊娠する。この時、メスである母胎には受精卵の選択権はないとされる。それは、たとえば、子宮はその子宮をもつメスの卵子以外の受精卵でも受け容れて、育ててしまうことに明らかである。

この意味では、どのメスの子宮を選ぶのかは受精卵つまり生殖される側の選択の問題だとされる。

以上の意味においては、子どもが生まれるという一見自明なことでも、それは、子どもを持つ側(自分の遺伝子を次の世代につなげようとする生殖を行う側)の選択と、子ども自身の側(生殖をされる側)の選択の、二重の選択の接点(交点)に子どもという次の世代が存在しているということになる。

このように考えると、おとな世代が子どもを持つということも、それはおとなだけの問題ではなく、また、子どもが生まれるということも、子どもだけの問題ではなく、ある種の社会的な選択の結果であるということになる。このような観点から、あらためて自分の

存在を考えてみると、どのようなことがいえるであろうか。

2. 「胎児」の意味論

(1) つわりの意味論

人間の女性が妊娠すると、一般に、妊娠 3 ヶ月（妊娠第 9 週目くらい）ごろからつわりが確認される。そして、安定期に入る妊娠 6 ヶ月ごろにつわりは消えるとされる。つわりという症状が現れるのは、基本的に人間だけだといわれる。しかし、そのメカニズムはいまだによくわかっていない。（最近では、ゴリラなど社会集団を形成しているサルにも、つわりらしきものがあることが観察されている。）

従来は、心理的な理由ではないかといわれていた。とくに妊娠した女性は、自分の身体にもう一つの生物が寄生することについての強い心理的なストレスを感じるといい、それを解消するために、生理的に嘔吐という症状を呈し、それが心理的なストレスを回避する役割を果たしているのではないかとされた。

しかし、この心理的要因論については、多くの女性がつわりがあってはじめて妊娠を知るように、妊娠を自覚していない女性がなぜつわりになるのかについては有効な説明となっていない。その意味では、つわりは胎児が起こしている生理的な現象なのではないかと考えられている。

その理由には次のようなものが挙げられる。一つは胎児による存在の主張という論理である。これはまた、つわりの時期とも関わりがある。上記のように、人間は発情期をなくすことで子どもを守る戦略を立ててきたが、それはまたメスの妊娠を不確定なものとし、妊娠しているメスと胎児を社会的に守ることを困難とするという危険と引き替えのものでもあった。その意味では、胎児は自らの存在を対社会的に主張し、その存在を守るように社会に訴える必要があったと考えられる。このことは、つわりの時期と深い関わりがある。妊娠 3 ヶ月から半年の間に集中的につわりが現れるが、それは受精卵が子宮に着床して、胎児として自らを形成する時期であり、かつ流産の危険が高い時期でもある。妊娠半年を過ぎると、基本的に流産することもなく、また墮胎も困難となり、しかも対社会的にも女性の腹部が大きくなって、一目で妊婦であることがわかるようになる。この意味では、胎児がその女性の中にいることを自ら主張しなくても、社会的にその存在が認知されるようになる。つまり、受精卵が胎児となり、自らの力で人間として形成することが軌道に乗った時期でありながら、自らの存在が社会的に認知されにくい時期に、胎児は自らの存在を対社会的に訴えるために、自らが寄生している女性に嘔吐させるという手段をとって、その存在を認めさせているのではないかということである。

二つは、自らが寄生した女性そのものに母親としての自覚、つまり胎児そのものを受け容れる準備をさせているのではないかという説がある。

いずれにせよ、つわりは胎児が起こすことによって、そこに社会的な意味が発生し、胎児の存在を認め、その社会的な受入を準備させるためのものではないかと考えられる。

そして、それは、次の「男のつわり」と関わりがある。

(2) 男のつわりの意味論

人間の男にもつわりがある。こういって、そんなバカなといわれるかも知れないが、それは、ここ数十年の間に、人間の男がつわりにならなくなった、または男のつわりが社会

的な現象として認められなくなったからに過ぎない。たとえば、現代でも、アメリカの製薬会社の統計では、妻が妊娠初期にある男性の胃腸薬の消費量が増えることがわかっている。これも、つわりの一種ではないかと考えられている。

日本でも、過去、男性はつわりになり、吐いてきたという記録が残っている。各地に男のつわりについての伝承が残っており、方言にもなっている。たとえば、宮城県や福島県では、妻がつわりの時に夫も同じ状態になることを「アイクセ」といい、また夫の食欲不振や嘔吐を「トモクセ」と呼んだりしている。他にも、東北地方で「男のクセヤミ」、大分県姫島で「オトジケ」、長野県下伊那郡で「つわりの共病み」、奈良県高市郡で「アイボノツワリ」と呼ぶことなどの記録がある。

さらに、擬娩・偽娩とよばれる風習を伝えているところがある。妻の妊娠・出産にともなう、夫の身体に変化が生じ、それを社会的な文脈に取り込む文化を持つ地域があることがわかっている。とくに、つわりだけではなく、妻の出産に際して、夫も分娩をまねたり、出産の苦しみを妻と共に共有するという風習を伝えているところがある。これを、擬娩・偽娩という。とくに、擬娩は妻の出産に際して、夫も床について苦しみを共有し、様々な社会的な禁忌に従うことで、出産を夫婦共同の仕事として引き受けたり、さらには、その夫婦が存在する、言い換えれば、生まれてくる子どもを引き受ける部族などの社会全体で苦しみやタブーを引き受ける風習を持っているところが、世界各地に存在することがわかっている。

このほか、つわり祭りなどの風習を持ち、妊娠した女性を囲んで、その部族の男性が吐き合う行事を行っている部族や、出産に際して、その部族全体が忌みにこもる風習を持っているところなどがある。

男性がつわりになるメカニズムは、女性がつわりになるメカニズム同様、よくわかってはいない。それが心理的な作用によるものであるのか、生理的なものであるのかも不明である。しかし、上記のような男のつわりや擬娩・偽娩の風習が中世ヨーロッパやアメリカ先住民などの記録に残っており、今日のいわゆる未開部族において保存されていること、日本の男のつわりについても、明治以降、社会の近代化と共に、男性が「通勤」するようになって、報告が減るなど、心理的な作用というよりは、男女間の生理的な作用と社会的な規範作用であることがうかがえる。

これは、女性のつわりが、胎児によって引き起こされているのではないかと疑われているように、女性がつわりになる物質を胎児が出すことで、その物質が女性の汗などとともに外に出、最も親しい関係にある男性がそれを吸い込むことで女性と同じく嘔吐するというメカニズムにあると考えるのが自然であるように思われる。

そして、このことは、胎児が自らを社会的な存在であると主張していること、さらにはそれに応じて、夫婦や社会がその子どもを受け容れる準備をすること、その上、子どもを引き受ける覚悟を社会全体で一つの文化や規範として形成することを意味している。この意味では、胎児は自ら、女性の子宮に寄生し、自らの存在を主張することで、自らを社会的に受け容れる準備をさせるであり、自らを社会的な存在として形成しているということ、その自己主張と社会に準備を求めるサインがつわりであり、その子どもの親となる男女やその子どもを受け容れる社会は、その子どものサインを受け止め、その子どもを引き受ける意思表示を行うと共に、出産の当事者である女性の苦痛を和らげ、子どもを社会全体で

育てる決意を示すという相互関係がつくられていたのだと思われる。

これらの意味で、胎児は本来的に社会的な存在として自らを形成し、それを主張することで、社会はその胎児の主張に応え、出生＝出産を支援するのであり、妊娠・出産は、子どもによって選択されたものでありながら、社会によって支えられるものとして、あったことを示している。それが、社会の近代化とくに商品経済の発展により、人間関係が切断され、地域の共同体が解体されるにともなって、つわりという生理的な現象そのものが夫婦の間においてですらも共有されなくなり、妊娠・出産は女性の孤独な作業へと意味が転化していったのだと考えられる。そして、それは、女性一人が引き受けるべき苦痛としての徴を強くもったものとして、社会的に認知されることとなった。

セックスがプライベートな文化として妊娠・出産とは切断された結果、セックスから妊娠・出産へとつなげるためにはある種の飛躍が必要となり、それを橋渡しするための様々な仕組みが、社会的に準備され、妊娠・出産を社会的な文化規範として受け止める制度が作られてきたのだと考えられるが、それが、近代社会以降、妊娠・出産が社会的な意味から切れてきわめてプライベートな作業へと意味を変化させるのであり、そのことによって、妊娠・出産はできれば避けたいものへと意味を変えてしまっているのである。子どもを産まなくなる社会は、このような意味論に乗っているのだといえる。

(3)胎動の意味論

妊娠中期以降、胎児は盛んに動くようになる。これを胎動という。この胎動は、従来、胎児の骨格や筋肉が形成されてきて、さらに神経がつながることによって、身体を動かし、身体機能を高める訓練をしていると解釈されてきた。しかし、近年、胎児の血流がわかるようになって、この解釈に新たな解釈が付け加えられることとなった。

胎児は、胎動によって、たとえば、手や足、さらには頭を突き出すことで、何をしているのだろうか。実は、胎児は、身体を動かすことで、母親に声掛けをしてもらい、さすってもらうことで、「うれしい」と感じているらしいことがわかっている。胎児が、身体を動かし、母親に声掛けをしてもらい、さすってもらうと、胎児の血液が脳の前頭葉の「快」の部分に集中することが観察されるのである。つまり、胎児は、身体を動かし、母親が反応することを心地よいことと感じているのである。しかも、この関係ができあがると、胎児は自ら胎動、母による声掛け、さすり、という関係を一連のものとして予定するかのような反復運動をすることが観察されている。胎児は、母親による反応を期待して、胎動するようになるのである。

このことは、胎児の胎動は単なる身体運動ではなく、母親とのコミュニケーションであること、しかもそれは胎児自らが期待し、うれしい、心地よいと感じることによって行われ、母親がそれに応えるようにし向けられるコミュニケーションであることを意味している。

(4)胎教の意味論

さらに、胎児は受胎 4 か月ごろから聴覚の機能が備わり、子宮内に伝わる声や音を聞いていることがわかっている。しかも、新生児は、子宮内で聞き覚えた母親の声を頼りに、出生後、母に授乳をせがむ行動をとることがわかっている。つまり、胎児が子宮内で聴いているのは、母親の声であり、子宮の厚い筋肉の壁を伝ってくる振動としての音である。

新生児に対する様々な実験からわかっているのは、胎児が聴いているのは、母親の声で

あるが、それは、母親の声のトーンとリズムそしてパターンであることがほぼわかっている。意味は当然、聞き取ってはいない。胎児にとっては、意味は外部世界のものであり、子宮内部にいる間は、意味は無意味である。視覚が十分に発達していない新生児にとっては、聴覚こそが自らの母親を識別する大きな意味を持っているのだといえる。

このような胎児の母親の声の選択と記憶について、現在、次のようなことが心配されている。つまり、過去においては、子どもの妊娠と出産は社会的な事業であるが故に、妊婦そのものもその子どもを自らが宿した社会の宝として、子どもに対して浴びせるように声をかけ、また、社会的な人間関係の中で、子どもを話題とする会話を交わすことが多く、四六時中しゃべっていたが、昨今では、核家族のきわめてプライベートな作業としての妊娠・出産へと妊娠・出産の意味が変わることによって、母親が胎児にほとんど声掛けをしなくなってしまったとの報告が上がっているのである。それ故に、胎児にとっては、母親の声を選択的に聞き取り、覚え、出生後に、母親識別に使うだけに十分な声掛けをしてもらえないという事態が生じる可能性が高くなっているといわれる。

しかも、ここに、昨今の少子化と社会的な競争の激化を反映してか、早期教育、とくに胎教がブームとなり、胎児に聴力がつく4ヶ月頃から、英語や音楽を聴かせるプログラムが商業ベースに乗って、拡大している。確かに、外国語や音楽については、たとえば絶対音感をつけるための臨界期が存在し、また外国語の発音についても、身体がその発音に適した形になる臨界期が存在するために、早期の訓練は合理的であるように見える。しかし、反面、母親が声掛けをしなくなったり、声掛けをしたとしても、きわめて少ない量の声掛けである場合、胎児は、胎教によって提供される英語や音楽の音を母親の声であると間違えて選択し、覚えて、生まれてくる可能性を排除できない。この場合、新生児にしてみれば、自分を生み、自分に授乳しようとするその人は、自分が聞き覚えた声を発することのない、自分で母親識別をして、授乳して欲しい人ではないということになる。すでに、このような状態で、授乳を拒否する新生児の存在が報告されている。

この意味では、過度の胎教は、私たち教育学を専門とする者の立場からは、好ましくない、むしろ、最も適切な胎教とは、子どもにきちんと母親識別をさせることのできるだけの母親による声掛けと、胎動に対する応答、つまりコミュニケーションを胎児の時期に十分にとってやることであるということになる。

しかも、母親の母性が、本能的なものではなく、子どもや小さくて弱い者との間で開発されるものであることを考えれば、子どもが母親識別をして、授乳をせがむことは、子どもが選んだ母親が、真の意味においてその子の母親になることにとって決定的な意味を持っている。母親は、子どもに「ボクのお母さんだよ」と選択され、授乳をせがまれることによって、はじめて母親になるのであり、その逆ではない。子どもに授乳を拒否される母親は、母性が十分に開発されず、その子どもをかわいく思えなくなるという事例も報告されているのである。

これらの意味では、胎児が母親を選択し、その母親を真の意味において母親へと形成していくのであって、おとなからの一方的な押しつけで母子関係が形成されるわけではないのである。

3. 〈いま〉を生きる: 中間者としての存在

(1)野生児の研究

上記のような胎児や乳児の存在のあり方は、幼児や少年になっても基本的には変わらない。その端的な例として、野生児の研究を取り上げる。「オオカミに育てられた子」として有名なので、知っている人もいるかも知れないし、やらせだとか、嘘ではないかという評価もあることを押さえておくことも必要だと思われる。ただ、ここでは、あることを考えるひとつの例として、取り上げておきたい。

この野生児は、乳児の時にオオカミさらわれ、少年になって発見されて、人間の社会へと連れ戻されたが、関係者の努力にもかかわらず、結果的に、彼らは人間としての基本的な特徴、つまり後ろ足での直立歩行、言語によるコミュニケーションなどを獲得することなく、死んでしまったという。私たち(牧野)は、この事例を「ヒトは人間になれる時期がある」という臨界期の問題として学んだ。つまり、ヒト種として生まれてきた動物は、人間社会に生きることで人間へと形成されていくが、それには時期がある、ある時期を超えてしまうと、いくら人間社会に存在しようとして、人間にはなれない、ということである。そして、この知見は「人間は生理的に一年の早産」という知見と重ねられながら、ヒト種の子どもたちは弱く生まれることで、社会的なケアを受けつつ、人間へと形成されるが、それはまたおとな社会へと入ってくる 3 歳前後までにそのような手当がなされなければならないということを示していると習った記憶がある。

しかし、いまここで、この知見を逆に見てみたらどうだろうか。たしかに「ヒトは人間になれる時期がある」が、この野生児たちは、オオカミにさらわれてから、人間に発見され、人間社会に連れ戻されるまで、オオカミの社会で生きていられたではないか。四つ足で歩き、遠吠えをし、前足を使わずにものを食べ、そして、結果的に人間になれずに、死んでいった。オオカミの生まれたての子どもを人間社会に連れてきたら、それは二足歩行をし、コトバをしゃべるようになるだろうか。このように考えれば、ヒトは人間になる時期があるが、その他の存在にもなれる存在なのだ、ということにならないだろうか。

このことは、人間の発達における適応戦略、つまり脳神経細胞の幼形成熟と減数適応という戦略とかかわりがある。人間の脳の形成は不完全であり、出生後、約 40 ヶ月までの間に脳神経細胞が急速につながって、基本的にあらゆる環境に適応できるように対応しつつ、ある環境に長く置かれることで、使わない神経細胞を殺して、その環境に適応できる自己を作り上げていくということである。

これは、適応であるが、ある意味では環境を選択しつつ、自らのあり方をも選択するという点においては、環境を切り取って自分のものになっていると見える。

この意味では、彼らの存在というのは、ヒトという動物とその置かれた環境との〈あいだ〉で自らが作り上げた人間という存在、ということになる。それはまた、私たちの存在そのものだといえる。

(2)レントゲン画の空間と時間

小さな子どもたちは私たちおとなと同じような時間の感覚を持っているわけではない。私たちと同じように、時間がリニアに流れるようになるのは、幼稚園に上がってからくらいだと考えてよい。しかも、この時間がリニアに流れるという感覚は、人間に固有のものではなく、第 1 部で述べたように、近代産業社会が成立して、時間を社会が管理し始めてから私たちが身につけた感覚であるに過ぎない。それ以前は、時間は循環し、また澱ん

でいたはずである。

子どもたちの時間も、彼らが私たちと同じ社会に生き、私たちからある種の規律の訓練を受けることで、私たちおとなと同じような直線的に、過去から未来へと流れていく時間感覚として、作られていくことになる。

では、もともと彼らはどのような時間に存在していたのだろうか。たとえば、レントゲン画という絵を知っているだろうか。ちょうど3歳から4歳くらいの子どものがよく描く絵で、一連の経験が一枚のなかに重ねて描かれている絵のことをいう。たとえば、私の子どもが保育園に通っていたとき、お散歩で動物園に行ってきた、帰ってからお絵かきをしました、見てやってください、という張り紙とともに、園児の絵が張り出してあるなかに多く見られたのが、このレントゲン画であった。ごちゃごちゃになっているので、おとなが見ると何を描いてあるのかわからないのだが、描いた本人を連れてきて説明させると、よくわかる。たとえば、こんな具合だ。「これ、なにかいたの?」「いま、お着替えしてるの」「これは?」「いま、保育園ついた」「これは?」「いま、お猿さんとお話ししてるの」「これは?」「へび」「これは?」「いま、おべんと食べてる」「これは?」「お花」「動物園にあったの?」「あるわけないじゃん。保育園に帰ってきたんだよ」「そうかあ」

彼らがこの場で多用するのが「いま」という言葉であり、その「いま」がすべて凝縮されて一枚の絵に描かれているのがレントゲン画である。この絵は、私たちおとなが見ると一体何が描かれているのかよくわからないが、彼らは一つひとつの経験を「いま」として、自分の身体に刻み込んでいるが故に、一つひとつを描くことができ、その絵を見たときに、一つひとつを「いま」として説明することができる。それは、言い換えれば、自分の身体において「いま」息づいている経験を、自分が一身に担って、「いま」そこに存在しているということなのではないか。

つまり、彼ら幼児は、過去から現在に直線的に流れる時間に生きているわけではなく、「いま」において生きており、その一身に自分と対象・環境との〈あいだ〉で自分のものにしたもの=経験を担ってそこに佇んでいるのであり、その自分が「いま」において存在していることによって、経験した対象や環境そのものも「いま」において存在している、このような存在のあり方をしているのではないか。言い換えれば、彼らは時間的にも空間的にも、おとなの感覚からは、中間者的な存在としてあるのではないか、ということである。

(3) 認知すること

このような幼児の存在のあり方は、実は、私たちおとなの存在のあり方とも重なっている。たとえば、講義室の机を掌で強く押してみる、または掌でパンッと叩いてみる。どんな感じがするだろうか。机は平らで、堅い、手が痛かった、机は冷たかった、等いろいろな感覚を得ることができる。しかし、その時に、自分の掌は柔らかく、暖かいという感覚を得た人は、いないのではないか。そこで、再度、机を通して自分を感じ取るように、掌で机を押してみる。自分の掌を感じ取ることができるのではないか。

本来的に、私たちはこのような相互性において存在している。

それはまた、感情においても同じことだ。たとえば、好きな人がいるとする。その人と一緒にいるとうれしいと感じる。その時、うれしいと感じるのは私であっても、その人がいなければうれしいとは感じない。その意味では、このうれしいという感じは、その人と

私との〈あいだ〉に生まれ、私はその〈あいだ〉に存在していることになる。

しかし、現実には、私たちは、一方通行の感覚や感情しか感じ取っていないのではない。机を平らで冷たくて、堅いと感じるだけで、自分の掌が暖かく、柔らかいと感じることはない。私は彼や彼女のことを好きだと感じるだけで、その人がいるからこそそういう感じを抱けるのだということを忘れてしまっている。

これは言い換えれば、主体と客体との関係で物事を考え、感じることに慣れてしまっているということであり、自分がつねに主体で相手や環境がつねに客体であるという関係しか存在しておらず、考え、感じるのはいつも主体である自分だという、一方通行の関係しか存在していないということである。そして、このような関係を私たちに強いているのも、既述のような近代社会の特徴である。つまり、モノを加工し、価値づけして、それを消費する民衆(労働者であり消費者である)へと育成すること、そして他の人々と均質で同じだから平等だと思わせること、さらにそこに国家的な価値を共有させて、「国民」へと私たちを形成すること、そのためには、本当は、上記のような相互性のなかで生きている私たちを、そうした相互性から切断して、国家という実態のないフィクションへと一方通行の意識をもたせる必要があるからである。

これはまた、学校のところで示したように、ある種の国家的な枠組みに適応を促されることで達成される感覚のひとつであるといつてよい。

(4)言葉と記憶と秩序

そして、さらに、この問題は、私たちが自分を保つために採用している戦略と深く関わっている。それは、言葉と記憶の操作による、自分という存在の確認＝自我の保全という問題である。

先ほど、子どもたちがレントゲン画を描くといったところで、彼らは経験を自分の存在に蓄積して、「いま」を生きている、つまり過去を過去として生きるのではなく、私たちおとなの時間軸では過去であるはずのものを「いま」という自分の存在そのものにおいて生きている、というようなことを示した。しかし、そこで、私は実は、彼らにその経験をコトバで表現させることで、ある種の秩序づけをやっていることになる。

彼らは、私の問いに答えて、「いま、〇〇してるの」と話してくれ、それが「いま」において彼らの存在そのものとして息づいていることを示してくれているが、実は彼らはそれをコトバで表現したことによって、その経験は彼らの「いま」の存在から離れ、記憶へと組み換えられている。その経験が彼らの身体を媒介とした息づかいを失い、誰か他の人のものであるコトバで表現されて、彼らがストックしておく記憶へと組み変わってしまうのである。しかも、コトバはコトバで表現できることしか表現できない。言葉遊びのように思うかも知れないが、コトバは私固有のものではないが故に、他人とのコミュニケーションの道具になり得るが、そうであるが故に、そのコトバで表現された私固有の経験は、他人に共有されつつ、変質して、言葉で表現できる限りのもの、つまり私が経験したものではないものへと変わってしまう。言い換えれば、私の経験は私の経験でありながら、それは他人が理解できる(つまり、コトバでわかる)一般的なものとなっている。そして、それは私が経験したその息づかいを失ってしまっている。

そうであるが故に、この記憶化された経験は、他人との関係で組み換えられつつ、取捨選択されて、自分を特徴づけるものと意識されながらも、それがコトバによって構成され

ているものであるが故に、固有性を失い、他人と交換可能なものとなってしまう。だからこそ、私たちは、この経験を他人に語りながら、他人が経験したものとは異なるという認知をすることで、自分の固有性を担保しようとする。そこで求められるのは、コトバで表現されつつ、他人とは異なる構造をもつ秩序を自分に課すことになる。

記憶が現在の自分にまで一貫して存在していること。これこそが自分の存在の担保となるのである。だからこそ、私たちの脳は記憶を組み換えて、私という存在が一貫していると思いきめるようにつねに秩序化を進めている。そこでは、自分の存在を危うくするような記憶や言語化し、秩序化できないような経験は、捨てられ、無意識化されて、なかったものとされている。

しかも、このような私を保つ戦略はまた、コツコツとひとつのことに打ち込み、生産に精を出す、製造業を中心とした産業社会において求められる人格モデルと相互にリンクしているものでもあった。私は他人と入れ替え可能となるが故に、私を保つために自分の出生から今日までの記憶を一貫させる必要があるのだが、それそのことが、私を入れ替え可能とする社会にとっては求められる人格モデルと表裏一体となっているのである。

(5) 秩序化される〈カラダ〉

こうして、本来的には自分という存在と対象・環境との〈あいだ〉において息づいていた自分というもの、だからこそ自分は自分でありながら、他人をその内部に息づかせている、関係態としての存在という自分を、コトバで表現可能な存在へと組み変えてしまうことで、私は私ではなくなり、他人と交換可能な状態となってしまう。本来、私たちの〈カラダ〉はそのような〈あいだ〉にあるものとして、存在していた。しかし、今度は、コトバによって私固有のものであったはずの〈カラダ〉が秩序化され、他人と入れ替え可能とされてしまう。つまり、労働力商品として売買が可能となるのである。

以上のように、〈いま〉を生きる中間者としての存在であった私たちは、この社会で生きること、私の固有性を失い、コトバへと解消されながら、他人との交換可能な存在へと組み変えられてしまう。ここで進められているのは、そのような存在への組み換えと、それによって行われる秩序化＝枠づけ、つまり適応の強制である。そして、このような適応の強制は、私たちの存在の本来的なあり方＝中間的な存在または他者との関係態を否定してしまうが故に、様々な不適応を生み出さざるを得ない。私たちの存在は、その存在の本来的な姿、またはその存在の固有性を回復しようとして、この枠づけ＝秩序化からの逸脱を試みざるを得ないのである。

4. 不適応の新しい形

(1) 「私らしさ」の病

しかも、いまの子どもたちは、いわゆる青年たちも含めて、既述のような近代産業社会から次の社会への移行期を生きている。それ故に、彼らの自我のあり方そのものがコトバによって私を認識することで、一貫した私を維持しようとするようなものから、新たな形態を獲得しようとしているように見える。ある意味で、学校という場は、近代産業社会の産物として、民衆を相互に交換可能な、コトバで表現でき、かつ単一の尺度で量化することのできる均質で「平等」な人間を「国民」として育成してきたのだが、それが、本来的に他者との〈あいだ〉に存在し、他者との関係態として自らを作り上げているが故に、固

有性を確保していた〈わたし〉を解体し、人間一般へと解消してしまう機能を果たし、それが適応を各個人に強いるが故に不適応を生み出してきたという側面と、それとは異なる新たな局面に遭遇しているといえる。

つまり、現在の学校において不登校やいじめなどの問題を現象させている子どもたちは、既述のような学校が生まれた近代産業社会という、民衆を、均質な労働力であり消費者として育成し、かつ言語的な統一を果たすことで「国民」化して、広大な市場を統一し、国家の経済を発展させる社会から、次の経済へと移行する社会に生きているのであり、そこでは、画一的な価値そのものが否定されるようになったのである。言い換えれば、物質的な欲望が飽和状態になり、人々の欲望の対象が価値・コードに移行していくような社会において、生産労働に従事し、画一的なモノを大量に消費する、均質で平等で、かつ画一的な価値観をもった大量の国民は不要化する時代状況のなかで、生を受け、成長してきているのである。

しかも、この社会は生産を重視するのではなく、価値の消費を経済の基礎へと組み込んでいく社会であるがために、労働者を育成して、価値を創造することよりは、既存の諸価値をさらに差異化することで再価値化して消費することへと関心を急速に移していく社会でもある。それ故に、この社会では、「個性」こそが重要であるとされ、さらに労働しないで価値を生み出すことが求められるような状況が生まれることとなった。

それがたとえば、1980年代半ば以降に発見された「子ども」「若者」「ギャル」という存在であり、彼らはそれだけで価値化され、消費される対象へと転化していった。そして、その頃から学校では個性化教育が提唱されることになり、勤労することが美德ではなくなっていった。むしろ、働かないで価値を生み出す社会がやってきたとされ、創造よりは選択であるとされる社会が作られることとなった。「まじめの崩壊」(千石保)である。

こうして、いまの学生たちが生まれた時代は、いわば「おんな」「子ども」という従来であったら勤労者に従属していた存在である人々が経済の主演としてもてはやされることになっていった時代であった。ここから、提唱されたのが、自分の商品価値を高めることであり、自己への投資であり、自分の個性を開花させることであった。労働によって対象を加工し、それを価値へと生産して、消費する、実体経済は後景へと退き、すでにある価値をずらして消費する、または人間の存在そのものを価値化して消費する空虚な経済が社会を覆うこととなったのである。

ここから、社会では、「私らしさ」を発揮することが重視され、集団主義的に他者と交換可能な状態である個人から、他者とは交換不可能な「私」が強調されることとなった。そして、「〈私〉探しゲーム」(上野千鶴子)がブームとなっていった。今日にまで続くナンバーワンよりオンリーワンという社会的な個人への圧力は、この時期に生まれたものであった。

人々とくに子どもたちには、「国民」化され、他人と交換可能な状態にされることから、次には個性を発揮し、自己主張することが「画一的」に求められるようになり、子どもたちはオンリーワンであることを「画一的」に求められることとなった。しかも、「国民」化の作用がコトバによって行われ、コトバによって人々が画一化されていったことに対応するかのようにして、個性の発揮もコトバによって自分を表現すること、自己表現能力の向上、セルフプレゼンテーションこそが重要であるとして、コトバが画一的に強制される

こととなった。

人々は一様に、「コトバ」で表現される「個性的な」「私らしさ」に病むこととなっていくのである。しかも、その「私」はモノの生産に携わる一貫した自我をもつ私ではなく、その時々で位置をずらされて価値化される、不安定な、一貫しない、多様な私でなければならないようになっていた。「個性的な私」とはいついかなる場においても個性的でなければならない、選択されるべきスタイルでなければならないのであったのである（『構造と力』浅田彰）。

(2) 生きづらい毎日

そして、このような価値をずらして、移行させ、富の移動を進めていくことで一見経済が発展しているかのように見えるゼロサムゲームの社会が、バブル経済を招き、それがはじけた後の平成不況において、子どもたちは、ブレークスルーのない、いわば「日常の永遠化」（宮台真司）ともいえるグレーな社会を生きることを余儀なくされていく。

たとえば、1998年以前の日本の自殺者数は約2万名から2万5000名前後を徘徊しており、人口10万人あたりの自殺者数は17名前後で、フランスと同じくらいであった。それが、1998年に一気に8000名近くの増加となってその後、2005年まで3万2000名前後を保つ高原状態となっている。人口10万人あたり約25名前後であり、先進国では類を見ないほどの高率となっている。

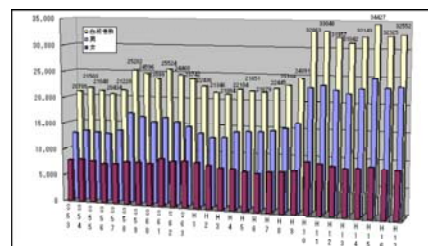
自殺をしている人々の多くはリストラにあったサラリーマンであり、またリストラされずに企業に残っているサラリーマンたちであり、年齢層は40歳代、50歳代が中心である。これを、精神科医の高橋祥友は「リストラ自殺」と呼んでいる。彼らはリストラされて経済的に苦しくて自殺するのではない。リストラされた結果、社会的な存在意味を否定され、

これまで生きてきた人間としての価値を剥奪されることで、うつ病を患い、自殺へと進んでしまった人々が大半である。他人と交換可能な状態にされ、一つの尺度で量化されて、社会へとリクルートされていった人々にとって、自らの存在を担保することは、帰属意識でしかないのにもかかわらず、1997年から始まった大量のリストラは、彼らからこの帰属意識そのものを奪い取り、彼らの存在意味そのものを否定して、社会へと放り出すことになったのである

しかも、リストラに生き残ったサラリーマンにとっても、苦しい生活が残されているのみであった。人員整理で人が減った職場で、従来と変わらない量の仕事を担い、かつ評価を受けなければならないのであったのである。その結果、過労死するかのようにして自殺する人々が急増した。

こうしたおとなたちの生活は、子どもの存在を直撃する。彼らは、自我を一貫させ、自分という存在を強く保つことは却って危険であることを学んでいく。「勉強して何になる、リストラが待ってるぜ！」とは、私(牧野)の子どもたちが小学校時代に叫んでいた文句である。現在、名古屋市で就学援助を申請する家庭は市内小中学校全家庭のうち約15パー

自殺者数の年度推移



(※最新データを2006年6月9日追加)

<http://www.t-pec.co.jp/mental/2002-08-4.htm>

セント、大阪市では 24 パーセントに上るといふ。それほど、家計は困窮しているのであり、その背景に、こうした大量の労働者のリストラが存在している。

この社会において、子どもたちは、人間は使い捨てられること、自分を一つの組織に置き続けることは危険であること、さらに自分という存在を一つにして、一貫させ続けることは危険であることを学び、かつ、この社会はすでに価値の生産をやめてしまった以上、残されているのは価値をずらして、富を移動させることができるのみであり、その社会にはコツコツと頑張ることで明るい未来が訪れることなどまやかしかでしかないと見抜き始めている。「努力主義」「ガンバリズム」が無意味化するのであり、コツコツと仕事を続けるための一貫した自我は無用化するどころか、危険なものとしてうち捨てられることになる。

(3)「解離」へ

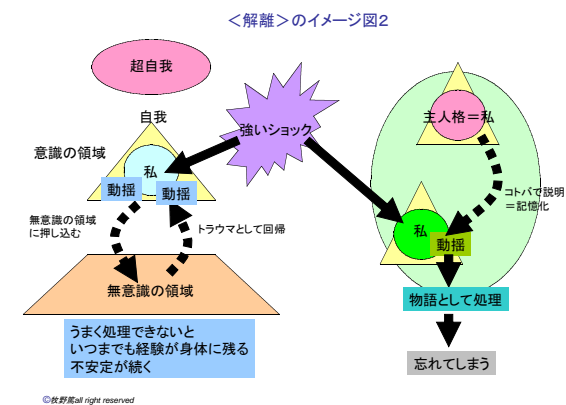
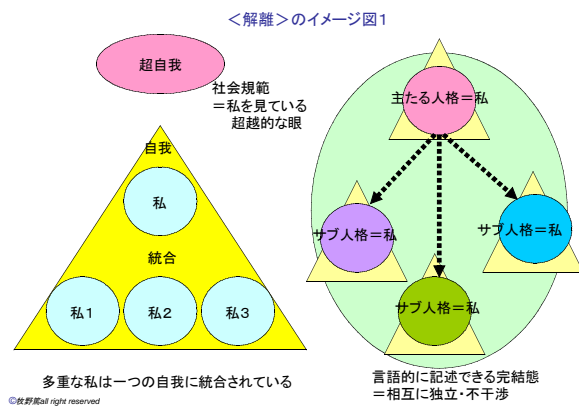
こうして、子どもたちは、自らが価値化され、消費の対象となりながら、かつコツコツと努力を続けて明るい未来を創造することを不可能だと感じつつ、自らの一貫した自我の統合を緩め、また自らを一貫した自我へと統合することをやめ、かつその多重な=多重人格的な自分を、「私らしさ」として表出するために、自らをコトバへとゆだねていくことになる。

一貫した自我は解体し、多重で、多様な、様々な価値を平面的にちりばめて、それらが相対的で対等な関係を結ぶようなイメージの自我が出現することになる。多重人格が社会的な存在の主流となるのであり、かつその各人格は平面的に対等な関係で存在しつつ、主たる人格によってコトバで説明される人格として存在することになる。各人格は、それがあつ環境においては主役を演じているために、分裂を起こすわけではないが、人格相互は不干涉であるが故に、その自我は記憶の一貫性を自己の生存戦略としては採用することができなくなり、むしろ、各人格がその場その場においてコトバで自らを語り続けることが、その自我にとっての「個性」であるとして、消費されることになる。

「解離」である。

「やったことのないテストが返ってくる」「授業中の記憶がつかまらない」「単語に反応し、論理をつかむことができない」 こういう学生が増えているが、これも彼らの生存戦略の一環であると理解される。

そして、この「解離」では、自己の内部の多重な人格はそれぞれが等価であるが故に、リアルは自らの肉体が存在している場にあるとは限らない。バーチャルがリアルであると



判断されれば、彼にとってのリアルはバーチャルな世界にあることになるし、その人格はバーチャルな世界をこそ自らの存在の場として選択することになる。

こうして、たとえば、2004年に佐世保でおきた小学校6年生の同級生殺害事件のような事件が起きることになる。

(4)子どもは凶悪化していない

しかし、ここで注意すべきは、こうした新たな自我のあり方が採用され、子どもによる不可解な凶悪事件が発生しているとしても、それが、マスコミで煽られるほど急増しているわけではないということである。実態は、人々が一般に感じていることとは逆で、日本の子どもたちは極めておとなしく、人を殺したり、強姦したりしなくなってきた。これは統計的にすでに明らかなことである。たとえば、19歳以下の少年による殺人事件の認知件数は、2004年に62件であるが、過去のピークであった1950年と1960年にはともに448件もあった。

子どもは「おとなしく」なっている



<http://kangaeru.s59.xrea.com/index.htm>

むしろ、なぜ、マスコミがこれほどまでに子どもたちの犯罪を報道し、世論を煽ることになっていて、人々がそのマスコミ報道に煽られて、子どもたちが凶悪化してしまった、子どものことが理解できなくなったと思ひこむようになったのか、が問われなければならない。これは、ある種、日本の社会が「ホラーハウス社会」(芹沢一也)になっていることを示している。言い換えれば、子どもの犯罪を「価値」として消費し、子どもが凶悪化したということを経済価値化して、消費することで、あることがもたらされているということである。このあることとは、子どもたちが凶悪化していることを価値化して消費することで、それは端的に、罪を犯さない私たちという側とそうではなくて社会的に隔離すべき異常な人々の側という二項分化を社会に招き入れつつ、社会に治安維持のための管理を導入することへとつながっているのである。この点に注意する必要がある。

子どもたちの凶悪化はフィクションであり、彼らを利用して、社会がある方向へと誘導されているのである。怖れるべきは、子どもたちではなく、おとなの方である。

(5)「自己愛」へ

こうして、「解離」と「凶悪化していない子ども」はともに一つの所へと収斂する。それは、「自己愛」的な心性を保ちつつ、自分の世界に閉じこもろうとする自我の保存戦略である。子どもたちは、自己の世界に自閉していこうとするが故に、社会との接点を自ら切断して、従来型の動機が明確な殺人事件などの凶悪事件にはコミットしなくなっている。つまり、怨恨や物取りなどの理由で人を殺すということは極めて少なくなってきたのであり、逆に、新たな存在形態のなかでの事件が極少数といってもいい程度におこされているのである。また、「解離」をおこしている子どもたちも、同様に、人格を多重に分散させつつ、一つの平面において並列的に配置しているために、その人格には上下の秩序がなく、しかも相互に不干渉であるために、記憶を一貫させることができないままになっており、それが彼らの自我の一貫性を解体して、対人関係や外部環境との関係において自ら

が保たれるという存在形態を否定してしまっている。そのために、彼らが自らを確認し得るのは、外部の記憶装置から自らに向けて発信されて自らの嗜癖が反応するようにして触発される細部へのこだわりにおいてであり、その細部も全体との連続性を欠いているために、自らの一貫性を保つ作用を及ぼさない。このような自我のあり方を〈データベース型自我〉という。

この〈データベース型自我〉の戦略をとる子どもや青年たちは、またその記憶が外部装置によって保全され、アルゴリズムによって計算されて、彼らに提示されることで、彼ら自身の嗜癖が発動され、そうすることで彼ら自身は自らのために外部が自らの好むものを提供してくれ、それを自らが選択して消費しているかのような感覚に陥ることになる。全能感が保全されるのである。しかし、このような存在にとつての悲劇は、自分が世界の中心であると信じ込んでいるのに、実際には外部の記憶装置から送られてくるアルゴリズムによって計算された、同じ条件を備えた人々に対するのと同じ情報を与えられることで、それを自分のために準備してくれた特別なメニューであると勘違いしていることであり、しかもそれを選択することは可能でも、それらがとぎれたときに、自分では何もできない状態に置かれているということである。

であるが故に、彼らはつねに上記の意味において外部とつながっていることを求め、かつ自分の周囲が自分を王であるかのように扱うことを求めることになる。ここから、自分には他人にはない何か特別な力があるのに、それを開発してくれない社会が悪いという、思いこみに支配された、自己顕示が行われることになる。いわゆる「エヴァンゲリオン症候群」である。

そして、これはまた、自己の嗜癖に自閉しながら、自己を世界の中心に置くことを要求するという、自己顕示と自閉的傾向が重なり合う自己愛として表出することになる。これはまた、「おれさま」と「ぼくちん」の結合によって生まれた「おれちん」であるといわれたりする(小倉紀蔵)。

(6) 半径1メートル以外は皆風景

このような「おれちん」的な存在の仕方は、また、電車のなかで化粧をしたり、着替えたりする女性たちの存在のあり方でもあるといわれる。彼女たちの自己意識には、他者は存在していない。そこにあるのは自分とそれを取りまく自分とはかかわりのない風景のみである。これまでは、社会学的には「仲間以外は皆風景」(宮台真司)と呼ばれていたが、最近では「自分を中心として半径1メートル以外は皆風景」と呼ばれるような状況にあるという。

(7) 援助交際の女子高生・女子中学生への調査から

上記のように自己愛的に自分の世界に浸って存在し、リアルであるということが、この現実世界であろうとインターネット空間であろうと、さらにはどこかのバーチャルな世界であろうと、自分が自分のものでありながら、他者のものであり、誰のものでもない〈コトバ〉を使って自分を表現しつつ、自分を世界へと解消してしまう空間において、コトバを用いてリアルであると感じられる場こそがリアルであるという存在を獲得することで、彼らは何を失っているのだろうか。

それはたとえば、援助交際に進出してきている女子高生や中学生への調査によってある程度明らかになっているともいえる。いまや名古屋市の援助交際は子どもがブローカーを

やっていて、援助交際のネットワークは私立女子校を中心に縦横に張り巡らされている。しかも、援助交際に進出してきている子は、いわゆる従来の一見してわかるような遊び人タイプではなく、着衣も極めてまじめな優等生タイプが増えているという。学級委員や生徒会役員をやり、成績の良い子たちが、援助交際に進出してきている。

援助交際に出てくるきっかけは、極めて簡単で、ある種の好奇心や自暴自棄的な行動によるものが多いが、それが援助交際にのめり込むようになるのには、彼女たちがこれまでに失ってしまったものとかかわりがある。

それは、〈カラダ〉である。高校の教師たちと援助交際の調査をしているときに会った女子高生は、自分が宿した子どもの超音波写真をもっていた。すでに墮ろしたというその子の写真を持ち続けている理由を、その彼女は、「この子と一緒に成長するの」「この子がいてくれたと思うととても幸せな気分になれる」と語っている。このことを、私の妻に話したところ、この子のいうことは実感としてよくわかるという。どういうことなのかというと、この子は、赤ちゃんを宿すことで、圧倒的な身体感覚を与えられた、生きているという圧倒的な実感を与えられたのではないか、ということである。しかも、自分の身体は自分のものであって、その胎児のものでもあり、その胎児の存在は胎児のものであって自分のものでもあるという、関係性のうちに自分が生きているという強い実感を与えられている。

このような感覚は、実は、多くのいわゆるアダルトチルドレン系と呼ばれている援助交際に出てきている女子高生・中学生に多く共有されているものである。彼女たちは、好奇心やお金ほしきで援助交際に進出してくるが、そこで相手の男性から自分のことを丸ごと受け入れてもらえるという感覚を得ることで、援助交際に特別な意味を見出してしまい、そこに自分の存在を強く感じ取ってしまっている。それは、また、この子たちを買う側である男性にも共有されている心性であり、彼らもこの子たちが自分に頼り切ること、全存在をあずけてくることに自分の存在意味を見出してしまっている例がかなりある。これは、一つの共依存関係であるといえる。

ここで彼らに決定的に欠けているのは、自分の存在が社会的な人間関係の中で作られた、関係態としての〈カラダ〉を基本とした、他者を取り込んでいるが故に、他者とは交換不可能な、つまり〈コトバ〉では表現できない、〈コトバ〉の獲得以前から他者との関係の中で作られ、他者との関係態であるが故に〈コトバ〉を受け入れ、〈コトバ〉の論理に自らをはめ込むことができる、自分に固有のありかた＝〈このもの性〉(斎藤環)である。言い換えれば、〈コトバ〉で言い尽くそうとして言い尽くせない何か、ある意味での残余感であり、〈コトバ〉を操る理性から見たら自らの欠損を示してしまうような、余り＝欠損感が欠けているのである。

(8)〈コトバ〉の自己言及性と〈カラダ〉の残余感

〈コトバ〉は自ら表現できるものしか表現できないし、自ら以前に存在していたものを表現することはできない。言い換えれば、〈コトバ〉を獲得する以前から存在し、〈コトバ〉の受容体である固有の〈カラダ〉を〈コトバ〉は語るができない。なぜなら、その〈コトバ〉は私のものではなく、誰かのものであり、誰のものではないからである。それが故に、私たちは〈コトバ〉を獲得することで、自らの固有のものであった〈カラダ〉をその〈コトバ〉が作り出している秩序に適応させることで、自らを秩序づけ、社会を構成する

ことができる。これが、学校を基本とした近代社会の創られ方でもある。

しかし、この時、〈カラダ〉は〈コトバ〉では表現できない〈このもの性〉を担保している、というよりは、〈コトバ〉は〈カラダ〉そのものを語り尽くすことはできない。なぜなら、〈コトバ〉は〈コトバ〉で語ることでできるものしか語ることができないのであり、〈コトバ〉以前にある固有性を意識し、語ることはできないからである。それ故に、私たちは、〈コトバ〉によって秩序づけられて、〈コトバ〉によって構成されている合理的な社会を構成し、かつその社会のなかで生きていながら、他方でその社会に過度に適応することで生きづらさや生き苦しさを感ぜざるを得ず、つねに自分の〈このもの性〉が回復しようとする欲望が頭をもたげざるを得ない。そこから、逸脱や不適応が生まれることになる。

そして、そうであるが故に〈コトバ〉は〈カラダ〉を馴致するために、さまざまな戦略を練ることになる。言い換えれば、私たち一人ひとりの固有性を〈コトバ〉で表現させることで、その固有性＝〈このもの性〉を〈コトバ〉の秩序のなかへと回収しようとすることになる。そこから生まれるのは、自己の空虚さであり、他者と交換可能な状態である自分、自分とは何かを感じ取れない自分、という虚ろな存在である。

これを養老孟司流に言えば、脳は自ら説明のつかない不合理な、そして自らに先立って存在しているながら、自らを支えている肉体を憎み、肉体を滅ぼすことで自らの合理性を表現して、自らの設計した環境を作り出そうとするが、その時つねにその自己の合理性を脅かすのが、自己を生み出し、支えている曖昧な肉体である、ということである。そしてそうであるが故に、脳は、肉体を滅ぼそうとするが、肉体が滅びることで自らを滅ぼしてしまわざるを得ないという逆説に支配されている。

しかし、いまやコンピュータネットワークの発達によって、記憶を外部化することができ、脳は自らを肉体の外に構築することで肉体を滅ぼしても、自らが生きながらえる方法を見つけ出してしまった。それが、上記のような「解離」を基本とする存在のあり方であり、〈データベース型自我〉の戦略をとる子どもたちの存在であり、彼らを感じるリアルの多重性として、表出してきているのが、今日の状況なのだといえる。

5. 〈カラダ〉を考える

(1) 遊びの変化

上記のような「解離」を一つの例とする多重人格的な存在の仕方は、たとえば少し前に子どもたちの間で流行った「遊戯王カード」などにも典型的に見られるものだといっていよい。遊戯王は、デュエル(対戦・対決)を基本としたトレーディングカードによって構成された遊びだが、そのアニメに見られるように、カードに記されたモンスターが、こちら側のリアルワールドに存在するのではなく、バーチャルな世界に存在していて、そのバーチャルな世界におけるデュエルを進めるために、決闘者たちはバーチャルな世界をリアルワールドとして戦うことが求められ、対決に敗れることでその魂がカードの世界に封印されてしまうという構造になっている。いわば、子どもたちの存在が単にこちら側のリアルワールドで、古き懐かしきメンコをして、カードをトレードするのではなく、人格的な多重性が組み込まれたものとして描かれ、そこに子どもたちがはまっていくという構造をとっていたといえる。だからこそ、モンスターたちはこの決闘者たちによって、その世界に「召

還」されることになっていた。しかも、決闘者たちは、何らかの形で選ばれた者、つまり自分の意思とは異なる何かの力によって、デュエリストとして戦うべく選ばれた者として設定されている。「エヴァンゲリオン症候群」にも対応するような構成になっていたのである。これが、同じトレーディングカードでもポケモンとは異なる点であろうし、だからこそ、いまだに「遊戯王カード」は根強いオタク的なファンが支えているということになるのだと思われる。

「遊戯王カード」は、ファミコンやテレビゲームとは異なり、昔のメンコで遊んだような感覚で、子どもたちが直接ふれあって遊ぶという形式を復活させたという論調が、しばらく続いたことがあったが、このように見てみると、「遊戯王カード」そのものが実はファミコンやテレビゲームと同じような構造をとって構成されていたが故に、子どもたちを虜にしたのではないかとも思われる。そして、だからこそ、「遊戯王カード」はカードをめぐる様々なトラブルがあり、またカードを核として、様々なメディアへと展開していき、子どもたちを取り込むことに成功したのだといえる。

(2)「子どもの「脳」は肌にある」

以上のような子どもや青年たちの存在のあり方、とくに〈コトバ〉にとらわれ、人格の多重性を基本とする存在を示す彼らのあり方を考える上で、とらえておく必要があるのは、次のようなことであるかも知れない。つまり、私たちモンゴロイドは、コーカソイドよりも脳とくに人間が進化の過程で一番最後に発達させた前頭前野、いわゆる前頭葉の発育が遅いということである。発育が遅いといけないのだろうか。たとえば、前述の発達とくに発達の早さを競うような価値観からは、発育が遅いというのは良くないことだという価値判断があり得る。しかし、人間の発達を考えると、前頭葉の発育が遅いということは、メリットでもあるといえる面がある。つまり、発育が遅いが故に、環境の変化に対応できるような脳の構成をとることができ、柔軟な適応力を持ち得るということである。但し、人間としての判断力など言語を司るこの部分の発育が遅いということは、弱い状態が長く続くということでもあるので、そのために手の込んだ子育ての文化を必要として、子どもとおとなとの密着関係が長く続くことになったのではないかと、考えられている。

しかも、密着関係で作られるのは、皮膚の感覚である。それは生理学的には脳を刺激して、発育を促すことになるが、心理学的には、皮膚に自分の親しい人々が貼り付けられて自分が形成されるという構造をとることになる。自分のカラダそのものが他者の身体を貼り付けて構成される関係態として作られていくことになる。

これは何を意味しているのか。つまり、私たちモンゴロイドの懇ろな子育ての過程で、子どもたちは親を基本とする周囲のおとなたちの身体を自分の〈カラダ〉に組み込んで成長し、おとなたちは子どもにその身体を貼り付けることで、単に生理的・遺伝的に自分の生命をつなげていくだけではなくて、文化的に自らの存在をつなげていくということになる。その意味では、子どもたちは親を中心とした社会的な人間関係の関係態として自らを作っていくのであり、そうであるが故に、つねに自分のなかには他者が息づいていて、一見多重的であるにもかかわらず、そこでは強い自分の存在の実感がそれこそ息づいているのである。

その関係の中においてこそ、子どもたちは「脳」を豊かに形成し、豊かな自分を作り出すことができる。「子どもの「脳」は肌にある」(山口創)といわれる所以である。

(3)失ったもの

このように見てくると、私たちが「私らしさ」の病にとりつかれ、生きることに苦しさを覚えるのは、その私の根拠であるはずの〈このもの性〉を担保する〈カラダ〉を失ってきたからである、またはそれを作ることを忘れてしまっていたからだといえないだろうか。私たちは、この〈カラダ〉を失うことで、自分の根拠を失い、それがまた上記のような社会の変動において、消費されるような構造へと組み変えられることで、「私らしさ」の病として表出してきてしまっている。このように見えないだろうか。

だとすると、いまここで問われなければならないのは、私たちのこの〈カラダ〉はどのようにして作られ、どのようにして私の存在の根拠となっていくのかということである。

それは、たとえば、既述のような胎児の成長のあり方や乳児の成長のあり方に見られるように、豊かなスキンシップとコミュニケーションによって基礎を作られるものであり、かつ次のような子ども自身の「意思」が作用しているものである。

たとえば、私たちは「(後ろ)足で二足歩行」するがそれは本能であろうか。実際にはそれは本能ではなく、二足歩行できる能力を持っていながら、臨界期までの間に、本人が立ち上がり、歩こうと強く意欲すること、本人が強い意思を持って自らを開発することで、そのように二足歩行が可能となることがわかっている。それは、また、上記の野生児の研究でも明らかのように、私たちが人間社会のなかで生き、強く人間になろうと意欲することで、自分の二足歩行の能力が開発された結果であるといえる。しかも、私たちが二足歩行するに至るには、寝返りを打ち、はいはいをし、立ち上がり、一步踏み出し、歩き始めるという節目節目で、私たちを取りまくおとなたちの賞賛と歓喜が関わっている。私たちは単に自分が立ち上がり、歩きたい、お父さんやお母さんと同じように歩きたいと強く意欲するだけでなく、お父さんやお母さんたちが喜んでくれることをうれしく思うが故に、自分で一生懸命になって立ち上がり、歩こうとする。そこには深い感情の交流が息づいている。

そして、この感情の交流の基礎になるのが、それまでに抱かれて、自分のなかに取り込んできたお母さんやお父さんのカラダであり、そのカラダがあるが故に、お父さんやお母さんの喜びが、自分の喜びとして、自分の実感を支えてくれるということである。だからこそ、私たちは、懸命に立ち上がり、歩くことが、うれしくてたまらなかったはずだ。

それは、コトバの獲得にもいえることである。コトバは既述のように自分のものでありながら、誰かのものであり、とても空虚なものであるにもかかわらず、それが基礎をもつことによって、とても豊かで自分を支えてくれるものになる。コトバの獲得は、基本的には、私たちは自分を十分に抱いてくれる人のコトバをまねることで獲得を始めるとされる。それは、多くの場合お母さんである。

乳児は、授乳を通して、単に母親を肉体的に受容しているだけでなく、精神的にも受け入れていく。たとえば、授乳中にじっと授乳者の目を見つめ、まなざしを交換してくれるように要求する。じっと見つめている目に対して、おとながまなざしを返してやることで、赤ちゃんはうれしくなって、勢いよくおっぱいを飲むようになる。そしてその過程で、授乳者や自分をよく抱いてくれる人の声をまねて、声を発するようになり、それが次第にその人のコトバのまねとなり、言語へと発展していく。

これを生活言語と呼んだりするが、それも、赤ちゃんが獲得したいと意欲して獲得され

るものである。そして、その基礎には、自分を取り込んだお母さんやよく抱いてくれる人のカラダが息づいており、自分を見つめ返してくれるその人のまなざしが息づいている。

だからこそ、赤ちゃんは、自分の発する音や言葉がその人に通じることを信じて疑わないし、実際にその人には赤ちゃんの発する言葉が意味あるものとして受け止められ得る。たとえ、周囲の人には意味のない音であっても。

私たちはこのようにして、つまり〈カラダ〉を周囲の人間との関係態として形成することで、それを基礎として、様々な社会文化を身につけ、周囲の人々との間で自分を作り上げていくようになっている。しかし、既述のような近代社会の特徴は、この関係を切り崩し、私たちを緊密な人々との生活から切り離して、一つの社会的な秩序へと組み込んできた。さらに、経済構造の転換が、私たちをさらにバラバラになるようにし向けてしまう。そこで失われたもの、それはこのような豊かな関係性をもった私自身の〈カラダ〉である。

おわりに

以上のような大きく二つの部分からなるこの講義で見えてくるもの、それは、私たち自身がいま立ち至っているこの社会における私たち自身の一つの姿とその姿が生み出されてきている背景、そしてその姿が本来もっていながら、すでに失ってしまいそうなあるもの、それが何であるのかということではないだろうか。

もし、皆さんが、現在、ある種の生きづらさを抱え込んでいるとしたならば、それはあなた自身に原因があるのではない。それは、社会的な関係態であるあなた自身が社会的に作られてきていることの証でもある。でも、それが苦しいということは、そのような社会的に作られたあなたが、実は、本来のあなたではないことを示しているといえないだろうか。

もちろん、この授業でお話ししていることは、人間についてのある一面に過ぎないし、話を単純化しすぎているという批判もあり得る。

しかし、このように人間のあり方を社会の構成と制度のなかでとらえて見ることで、そうすることで、私たちとは一体どのような存在なのだろうかということを考え、そして、その存在が自分が生きるのにつらいものとなっているのであれば、それを何とかして生きていて良かったと思えるようなものに変えることはできないのだろうかと考えることへとつながっていく。

この授業を通して、こんなことを考えて欲しいと思う。それが、教育学的な社会へのまなざしの第一歩となるはずだから。

〈参考文献〉

この講義では、主に以下のような文献を参考にしながら、構成した。

* 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』、ちくま学芸文庫、2005年

* 石原千秋『国語教科書の思想』、ちくま新書、2005年

* 今村仁司『近代の思想構造—世界像・時間意識・労働』、人文書院、1999年

* 今村仁司『群衆—モンスターの誕生』、ちくま新書、1996年

* 上野千鶴子『〈私〉探しゲーム—欲望私民社会論』、ちくま学芸文庫、1992年

* 小熊英二『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜』、新曜社、1995年

- *小倉紀蔵『おれちん—現代的唯我独尊のかたち』、朝日新書、2006年
- *荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史』、中公新書、1995年
- *荻谷剛彦『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ』、有信堂、2001年
- *斎藤環『文脈病—ラカン・ベイトソン・マトゥラーナ』、青土社、2001年
- *斎藤環『心理学化する社会—なぜ、トラウマと癒しが求められるのか』、PHP エディターズグループ、2003年
- *斎藤環『解離のポップ・スキル』、勁草書房、2004年
- *桜井哲夫『「近代」の意味—制度としての学校・工場』、日本放送出版協会、1984年
- *澤口俊之『幼児教育と脳』、文春新書、1999年
- *下條信輔『まなごしの誕生—赤ちゃん学革命』、新曜社、1988年
- *関廣野『みんなのための教育改革—教育基本法からの再出発』、太郎次郎社、2000年
- *千石保『「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち』、サイマル出版会、1991年
- *高橋祥友『中高年自殺—その実態と予防のために』、ちくま新書、2003年
- *宮台真司『終わりなき日常を生きろ—オウム完全克服マニュアル』、筑摩書房、1995年
- *宮台真司『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』、朝日新聞社、1997年
- *宮台真司『制服少女たちの選択』、講談社、1994年
- *柳治男『〈学級〉の歴史学—自明視された空間を疑う』、講談社、2005年
- *山極寿一『ゴリラ』、東京大学出版会、2005年
- *山極寿一『父という余分なもの—サルに探る文明の起源』、新書館、1997年
- *山口創『子供の「脳」は肌にある』、光文社文庫、2004年
- *山下恒男『反発達論—抑圧の人間学からの解放』、現代書館、1977年
- * J.A.L シング著、中野善達・清水知子訳『狼に育てられた子—アマラとカマラの養育日記』、福村書店、1977年
- * J.M.G イタール著、中野善達・松田清訳『新訳 アヴェロンの野生児—ヴィクトールの発達と教育』、福村書店、1979年
- * S.ボウルズ・H.ギンタス著、宇沢弘文訳『アメリカ資本主義と学校教育—教育改革と経済制度の矛盾』(1)(2)、岩波書店、1986年、1987年
- *ミシェル・フーコー著、田村俣訳『監獄の誕生—監視と処罰』、新潮社、1977年